

スタンリー・ブラック監督の対談は予定通り、十五分で終わっていた。内容は主役、ナタリー・ポリトウワの印象に撮影時の苦労話。本作の見どころに次回作への意気込み等々、パンフレットにもある程度と他愛もない。だが監督の口から聞けるとなれば誰もが一言一句へ耳を傾け、気づいているからこそ監督もまた通訳を差しおくと、おどけて日本語を放つ愉快なひと時でもあった。

そんな会場は冒頭から茹でたてのような湯気を上げている。もちろん大詰めの花束贈呈にも滞りはなく、控室でのリラックスしたやり取りが功を奏すと贈呈式は形式張ることのない、まるで古くからの恩人をねぎらうような一場面を彩りもしていた。

その後の記念撮影では監督が「これから大変重要なシーンの撮影に入ります、みなさん静かに」と、現場さながらの指揮を取って観客を沸かせている。これも監督らしいエピソードといえさうだろう。退場に備えて防音扉前に立つ水谷と百々へ、写真へ入るよう声をかけてもいた。

断り切れず加わった撮影は、ささやかながらもこなした共同作業に会場の一体感をより高めている。監督も「いえー」と百々へ指を立て、振り返っては観客へ良い撮影だったと拍手を送った。

十三時ちょうど。返される拍手も割れんばかりと惜しみなく、盛り上がりも最高潮のう

ちに舞台挨拶は幕を閉じる。

控室へ戻る際、横切るロビーに人だかりはできていたが監督に飽き飽きした様子はない。もらいたての花束を振って応じる笑顔は帰りのタクシーを待つ間も続き、やがてそれは百々へも向けられていた。

あまたギャラリイの中、監督の目をしっかりと見つめて手を握れば、何も、何事も、起こらなくてよかったと百々は思う。それは舞台挨拶の進行に滞りがなかったことのみならず、わずかながらも過ったプレゼントの爆発等々、ひそかな懸念についてもなかった。同時にこの人もまた何ひとつ知らされていないのだろうなと思い、無邪気な笑みに切なさもまた覚えてみる。

届けられたプレゼントは改めて監督の事務所へ配送する予定だ。だからしてタクシーは花束だけを抱える監督を乗せ、ドアを閉める。振り返るような湿っぽさこそ似合わない。そうしてスタンリー・ブラック監督は風のように、「20世紀CINEMA」を後に行った。

おかげで混雑は両シアターの入れ替え時のおさまるばかりとなる。

控室でブラック監督へ頭を下げて以来、その姿を見ていない田所は映写室にこもりきりだ。ようやく取れた休憩時、遠目にのぞけば暗闇の中、スクリーンをチェックしながら好物

のフランスパンをかじる横顔はいつになく真剣で、百々に声を掛けることはできていない。フロアではグッズの売れ行きが好調だ。無論、トラブルらしいトラブルは起きず、あつたとすれば映写係、松川のダウンくらいだと言えよう。

まさにシアターAは二十二時二十五分。継いでシアターBは二十二時三十五分。上映を終了する。さらにそれから十分後の二十二時四十五分。くたくたと言っても過言でない倦怠感と、しかしながらそれ以上の達成感を残して「20世紀CINEMA」は正面扉を施錠した。

手早く皆で明日の準備を済ませてから、ジュースとお菓子だけの簡単な打ち上は行われている。そのけだるい雰囲気盛りに上がる、とまではゆかなかったものの、それぞれの武勇伝が披露されたことは言うまでもない。あいだ松川からも連絡は入ると、明日はどうか出社できそうだと知らされている。そんな松川は松川で、半日ほど病院で点滴を受けていたらしい。彼も彼なりに忘れられない一日となった様子だった。

経て百々が帰宅したのは日付も変わった頃だ。家族の寝静まったリビングはすっかり冷えて寒々しく、疲れ切った体をとにかくソファへ投げ出していた。世界の監督がお忍びで来日していたのだ。うー、と唸って気になるテレビのスイッチを入れてみる。ちょうどと映し出されたニュース番組へ、落ちてくるまぶたをこじ開け耳を傾けた。

アナウンサーはそこで百々が奔走している間、火事が起き、政治家の献金問題が新展開を見せ、海外の首脳が興新国を訪問し、車が爆発したことを知らせている。

ふーん、と鼻を鳴らしていた。

次の瞬間、跳ね起きる。

もちろん含まれた言葉もしかりだったが、そのとき画面を過ったものの方がこれでもかと百々の目を覚まさせていた。ハートだ。一瞬だったが映し出された消火活動も慌ただしい中にいた。なら閃くのは「強襲」の二文字で、急ぎ百々はテレビのボリュームを上げてゆく。途中から声を大きくしたアナウンサーへヒザを向けなおした。

「……施設するロード前交差点で、右折待ちの車両が爆発、炎上しました。伴い八台を巻き込む玉突き事故が発生。爆発した乗用車の運転手、通行中の男女を含む十人が軽傷です。爆発の詳しい原因は不明で、現在、警察が調査を進めています。次のニュースです」

「うそ……」

もちろん百々の耳に次のニュースは入ってこない。「爆発、炎上した車両」というくだりだけが頭の中を回り続ける。回しながらワインレッドのワゴンの他にどんな車両があったろうか。必死になって思い出した。思い出せず爆発した車両がまるでそれであるかのように錯覚する。

だとしてアナウンサーは軽傷程度だと知らせていたはずだった。最悪は免れたのだと信じかけて、情報操作がお手の物であることもまた今さらのように痛感する。

テレビを消していた。見るべきものを失った目がテーブルに投げ出されていた新聞をとらえる。広げてすぐにも交差点の真ん中で燃える車と、連なる玉突き事故の写真を目にしていた。囲む記事へ目を通そうとするが、順序良く文字が拾えずただ焦る。

落ち着け。言い聞かせていた。書かれていることは真実でない。気づき、トートバックを引き寄せる。だが放り込まれたままの端末に着信の形跡こそない。

ハートが無事なら気がかりなのは残る四人だろう。中でも爆発した車両がワゴンなら、と考えて取り返しをつかない方向へ想像が膨らんでゆくのを止められなくなる。いてもたってもおれずホットラインをつなげかけた。

「……やだな、もう」

手を止める。

何しろ想像した万が一をオペレーターの淡々とした声で聞かされたくはなかった。聞かされたとして、そのまま寝床につけるハズこそない。

明日が休みなのは舞台挨拶準備の代休だからだ。これ以上、いいタイミングはないだろう。いや、呼び出されてもいないのに出向いたなら、また百合草に説教されるだろうか。だ

がその杞憂に勝る動機はあった。

猛烈な勢いで風呂へ入る。ままにベッドへ潜り込んだ。ひと眠りすれば否が応でも朝は来る。まるで時間と空間を飛び越えるワープへ挑むような気持ちだ。百々は、明日へ向かい力いっぱい両目を閉じる。

翌朝、太陽を背負いスロープを駆け降りた。

「106」番などと絶対に「テロ」をもじってつけたに違いなく、だからしてワインレッドのワゴンはそこにあるハズだと思う。
が、ない。

すっぽり空き地と空っ風を吹かせている。光景に上がる悲鳴を押し止めたその顔はムンクの叫びと変形し、叩きつけるように百々はカードをエレベータへ押し付けた。やっこの思いで乗りこんだエレベータの挙動はいつも通りが静か過ぎて気が利かない、と言えぱ八つ当たりか。気持ちは紛れず、エレベータの扉が開くなり通路へ飛び出す。

「ハナさんっ!」

ちようと背中ではオペレーティングルームから出てきていた。

「あら、百々さん。今日は昼からじゃ?」

その長い黒髪は「20世紀CINEMA」で見たときと何一つ変わらない。なびかせた後ろ姿も凛々しく、ハナは振り返る。

「ほっ、ほかの人はどこですか？ レフはっ？」

「ほか？ レフならストラヴィンスキーと……」

駆けつけた百々へ、豆鉄砲でも食らったような顔で仮眠室へと視線を投げた。

「さっきまで一緒にいたけれど」

教えて再び百々へと戻す。

が百々はもうそこにいない。脇をすり抜け仮眠室へと走っていた。飛び込んですぐにも目に入ったストラヴィンスキーへ声を上げる。

「外田さんうっ！」

「あ、百々さん、おはようございます。早いですねえ。何かあったんですか？」

少々疲れた面持ちのストラヴィンスキーは眠たげだ。浮かせた眼鏡の奥で目をこすりながら歩いてなんぞいる。

「な、何かあったって、あつたに決まってるじゃないですか。あつ、あたしニュース見てっ、びっくりしてっ。あれ、この車ですよねっ。赤のワゴンがガレージからなくなっ
てて、爆発したって、ごうごう燃えてたの見ちゃったんですけどおっ！」

ばくばく空を食む百々はもう涙目だ。

「えっと、あと乙部さん。乙部さんは無事なんですか？ レフはもう、燃えちゃったんですかあっ？」

いや、それはあんまりである。

「ちよ、ま、まあ、落ち着いてください」

あんまりすぎてストラヴィンスキーもなだめにかかった。どこかしら歪んで見える眼鏡を押し上げキラリ、分厚いレンズを光らせる。

「その件なら心配ご無用です」

見上げて百々は唇を噛みしめた。

「榊はオツさんが空路で拘置所へ送り届けました」

つまり乙部は無事だと分かる。

「陸路はハナさんが榊役を務めるって図計画でして」

知らされたひたすら「ええ」と目を潤ませた。

「そこで予告の狼煙どおり強襲に出くわしたわけですが。ワゴンへはバズーカー、撃ち込まれちゃいます」

「ぶあ、バズーカーあっ？」

信じがたい単語に身をのけ反らせる。

「相手もサブマシンガン携帯で七人もいたものですから」

「マッ、マシンガンうっ？」

「ちよっと穏便にはすませられなくなっただんですよね」

「ち、ちよっと……。ちよっとですかあ、それえ？」

思い浮かべたなら光景は、もはや正月映画も目玉のアクション超巨編と展開されていた。かと思えば入る「ブラボー、ゴー」の合いの手に、映像は戦争モノかとソリッドを極め、おかげで増すのはリアリティが増したりリアリティにこそ実感が伴わないのだから事態はワケが分からない。

「あれで手榴弾でも投げられていたら戦争になるところでした」

締めくくるストラヴィンスキーは「ははは」と笑うが、無論、百々が一緒に笑えるはずもなかった。

ただ耳の奥で甲高く尾を引く投てき音を聞く。とたんソリッドだった映像はセピア色と干からびて、辺りに空襲警報を鳴り響かせた。押し寄せるB29の影は見上げた空におどろおどろしく連なり、支配された交差点が焦土と化してゆく。疲れ切った市民に兵隊はそんな交差点をさ迷い歩くと、身なりの整った百々を見つけるなり顔を突きつけ水をくれ、と

口々に押し迫った。

「せ、戦争反対い……」

いや、違うだろ。

見透かしストラヴィンスキーも手を振ってみせる。

「いえ、戦争にはなってないですよー」

おかげで戦地から帰還できたのは百々の方だ。

「じゃ、レフは？」

まだその名前を聞いていなかった。瞬間、瓶底眼鏡の奥でストラヴィンスキーの目は厳しくなる。

「あの人は相変わらず言っても聞かない人なので」

そんな切りだし方こそないだろう。百々の中でまさか、もしやは吹き荒れる。聞いておいて、わわわわ、聞かないフリだ。耳を塞いだ。

「上の病院にいます」

それでも入ってきたのだから仕方ない。再びムンクと絶叫した。その背に縦と密集するのが効果線なら、今にも額縁の外へ吸い出されそうに伸び上がる。

きっと今頃、ミイラ男だ。

走っていた。

デカイだけに包帯はかなり必要だろう。看護師も重労働に違いない。

乗り込んだエレベータは地上を目指し、駐車場脇の夜間通用口から病院へ飛び込む。道なりに細い廊下を行けば百々は、受付カウンターの真横から顔を出していた。見回すフロアは外来診療も始まると老若男女で混雑し、とたんトップモーションは百々にだけかかる。レフだ。どうにも目立って仕方がなかった。いくつも並ぶ扉を引き開けちようと、診察室を後にしている。

その体にはちゃんと四本、手足がついていた。入院していそうにもなければ車椅子でもなく、松葉づえをついているわけでもなければ腕もつてはいなかった。包帯でぐるぐる巻きは想像が過ぎたとして、包帯は「ぐるぐる」の「ぐる」も巻かれておらず、退屈すぎるほど服装も整っている。動きなんぞ、これが実に整合性が取れていて、どこかしら不具合があるようにすら見えなかった。むしろいつも通りだ。いつも通りでそれこそ全てが嘘っぽくすらある。

「……なん、で？」

夜間通用口から駐車場へ抜けるつもりか。そんなレフは待合の中を、百々の方へ向かい歩いていった。

「レフっ！」

呼び止め声を張り上げる。なら耳も問題ないらしい。すぐにも行き交う人の間から百々を見つけ出し、駆け寄り進路を塞ぐ姿を見下ろした。かわして百々が反復横跳びを繰り返せば、これまた機械的なまでに動きを追って目玉を動かす。

「朝から何だ」

出合いがしらの挙動不審を問うと、思考の正常ささえ証明してみせた。

「なっ、なんともないのっ？」

やはりレフは夜間通用口へ向かっていたようだ。そんなことか、と歩みを再開する。

「お前こそ、診てもらった方がいいんじゃないのか」

「だ、だって車が黒焦げでっ！ 聞いたら外田さんはマシンガンにバズーカーの、戦争だからレフは上で死にそうだってっ！」

というか、誰もそこまで言っていない。

「あたしてつきり車と一緒に吹き飛んだって思ったのにっ！」

それこそ暴言だ。何を言い出すんだとレフも振り返る。

「お前は俺を殺したいのか」

確かに要約すればそうなるのだから仕方ない。

「だ、だってえ」

「あの場にお前がいたらそうなっていたろうが、ぼうつとしていられるのもお前くらいだ。とっとと逃げていろ」

やけに近く感じられたのはレフに合わせて歩いたからだだろう。夜間通用口を潜り抜けたレフはもう、エレベータへカードを押し当てていた。

「そう簡単に死ぬつもりはない」

開いた蛇腹扉の向こうで灯る蛍光灯がキンキン、音を立てている。

「奴らを野放しにすることこそ、できないからな」

聞えて眩しさに細めた目を、百々はレフへ持ち上げていった。いや、覚えのある言い回しに体は勝手に動いて、吸い込むようにその横顔をただ見つめる。

忘れもしない。初めて耳にしたのは春山の乱入で握らされた爆弾を解除していた時だ。そのとき百々はレフを薄情者だと罵っている。だが今、聞かされても同じように思えない。理由など簡単だ。レフにはテロで命を落とした身内がいる事を知っていた。

「そか、バッファロー……なん、だ」

スクリーンの中で逃げ行く主人公は、レフそのものだ。

そんなレフがエレベータへ乗り込んでいった。のぞいたレンズで行き先を指定する姿に、

百々も中へと急ぐ。

「隣の客がひどい主人公だと言っていたあの映画か」

などとカゴの中で話を再開させたのはレフだった。

「え、映画、見たの？」

「あの日は朝から劇場にいた。ローテーションで上映中の監視もしている」

なるほど。その日、百々は昼からのシフトで気づけなかったらしい。

「主人公の選択は間違っていない」

言うレフの声は固かった。

「不満を抱くなら最後、ヒロインの元へ戻ったことだけだ。ヒロインが死んでいれば戻ることとはなかった。それが主人公の判断を誤らせた。おかげで奴らは野放しのままだ。逃げたことじゃない。俺が気に食わないのは、そうやって主人公もまた犬死した点だけだ」

つまり自分には戻るべくヒロインなどもういない、ということか。だからしてしくじりようなドジは踏まない、とでも言っているのか。勘ぐるほどに確かめたい気持ちは百々の中で大きくなった。だが堂々、口に出来ないのは明かしてもいないプライベートが絡むせいで、レフが明かさないのは知られたくない話だからだということくらい百々にも十分わかってる。

従い握り潰せば潰すほど、百々の中で後ろめたさは膨らんだ。堪えるほど覚える罪悪感に、力は唇へこめられてゆく。

エレベータは他人事と、そんな百々の前で軽やかにドアを開いていた。なら降りぎわ調子を探るように首を傾げたレフの仕草は、見間違いでもなんでもないだろう。

「で、でもさ、どこか悪いんだよね？ でないと診察なんて必要ないから」

「飛び降りた屋根が高すぎて、下の車を潰した」

と、教えて言うそれが原因らしい。

「……は？ つ、潰した？」

「どうも肩の調子が悪い」

「潰されたんじゃないくて、潰したの？ で、肩の調子が悪い、だけ？」

「だからお前は、そんなに俺を殺したいのか」

エレベータを降りたレフに睨まれてみる。

「あは、はは。まっ、まっさかあ」

と、それは仮眠室へ通じる通路からだ。目にも鮮やかな赤のスーツは現れていた。曾我だ。気づいてこちらへ振り返る。その目はすかさず腕時計へも落とされた。

「百々さんって、予知能力でもあるのかしら？」

顔を合わせて早々、あきられる。

「ミーティングは昼以降の予定だったけれど、ハートも帰ってきてるわ。面子がそろって
るなら遅らせる必要はないかも。チーフに報告してくる」

ワケは一足飛びと明かされ、いいわね、とレフへ目配せは送られた。

「湿布臭くなっただけだ。他に用はない」

聞いた曾我がきびすを返す。見送って百々もレフヘアゴを持ち上げていった。

「ミーティング？」

どうも気になるらしい。あいだも投球前のピッチャーのように肩を回し続けていたレフ
の動きは、そこで止まる。

「SO WHAT の蜂起が決定的なものになった」

それこそ戦争になる。世界が傾いたような気がして百々は息をのみこんだ。

「ところで」

「はい」

果てに改まるレフの前に、百々も相応、かしこまる。

チーフ室にはもうすでに、いつもの面子が集まっていた。欠けた顔があるとするなら招

集をかけた百合草本人で、レフが話を切り出したのはそんな百合草を待つさなかだ。

「スタンリー・ブラック監督に会ったらしいな」

「は、い？」

言うものだから百々の耳と脳に齟齬は起きていた。柿洪デスクの傍ら、ドアが開いたのはそのときで、それまでの慌ただしさを引きずり百合草は姿を現す。並んで歩く曾我とのやり取りも早いまま、握る紙束をデスクへ叩きつけた。

「聞いていると思うが SO WHAT 蜂起の件と今後について、ここでもう一度、情報ですり合わせておく」

ぐるり、集まった一同を見回し、前置きを省いて促す。

「ハナから頼もう」

などと指名が唐突だったとして、ハナが乗り遅れることはない。

「じゃあ、護送車へ乗り込んできた一人の言葉を」

入れた一呼吸で声を低くする。

「予定通りだ、同志。プライズにサプライズ。二十四日、我々は蜂起する。……聞きだすためにもう少し親密になっておけばよかったかしら」

おどけて最後、肩をすくめた。

「残念ながらその声は拾えていない。間違いは？」

「ないわ」

何度も繰り返されたやり取りなのだろう。ハナに記憶を反芻する素振りはない。

「なんだ。その二十四日はいつだ。次か？」

ハートが口を開いていた。

「だとすれば三週間、切ってますね」

床を見つめてストラヴィンスキーも苦々しげにこぼす。

「それまでに捕まえなきゃ、本当のテロは、革命は始まっちゃうってことなんですか？」
百々も言い得ぬ不安を覚えて身を乗り出した。

「再来年の二十四日だというなら何もいうことはない。だからと言って来月でないなら次の二十四日へすり替わるだけだ。どちらにせよ我々に与えられた猶予は常にひと月でしかない」

百合草はそこでようやく腰を下ろし、声は壁際から投げかけられる。

「ついに世の中へプロパガンダをまき散らし、一斉に活動を始める気だ、ってところかな」
乙部だ。

「だとしてまあ慌てることはないんじゃないのか？　なにしろ成り行きは予想していた通

りだからね」

だがどれほど予想通りだろうと、それこそ最悪の構図でしかない。標的とされるだろう娯楽施設が、いやそこで楽しむ人々の笑顔が、たちまち百々の胸に広がってゆく。

「だとすればもう俺たちだけでは手に負えんだろう？」

投げるハートの見解は冷静だ。それだけに似合わず弱気と響いてもいた。

「なら、もう一件」

受けて予想していたような百合草が、話してやれとその目をレフへ流す。

「いや。その日、一斉に蜂起が起きるわけじゃない」

従い明かされてゆく話はこうだった。

「取り逃がしたが、群衆に紛れて交差点を観察していた男は俺に言った。我々はリーダーを慕っている。ファンとしてリーダーの望みを実現するため計画を進めているが、リーダーが蜂起しないならそれまでだ」と

「言う通りであれば SO WHAT というテログループはリーダーの意思を確認後、各地で一斉蜂起することが予想される」

後を引き継ぐ百合草の口調に淀みはない。

「憂う事態は二十四日の意思表示、その後だ。二十四日はその分岐点とみていい。その発言

にもれはないな」

ハナ同様、レフへも確認してみせた。

「ない」

「だが連携を無視したやり方と、挙げた成果は別だと覚えておけ」

やりとりに、百々ですら言わずもがなの雰囲気を感じ取る。だが百合草がそれ以上、言及することはなかった。

「いうまでもなくテロリスト全員の確保が最善であることに変わりはない。だがこれより、リーダーの意思表明を阻止すれば当面の安全が保証されることも可能性として残された」
「つまりこの三週間たらずでリーダー、もしくはその居場所を特定しろということか」

意味するところをハートが代弁してみせる。

「同志全員を押さえるよりも現実的だ」

「その件に関して」

言ったハナが小さく挙手する。

「あの七人からはまだ何も聞けていないわ。彼らにも人権はあってれっきとした怪我人だとして話よ。渡会警部殿と順番に締め上げるのは明日以降の予定」

とはいえそれら言質が取れるとは限らない。知らされたのはつい最近のことでもある。

「期日があるなら黙秘も貫きやすい。七人共が黙り続けた場合は？」

誰も懸念をレフが口にした。

「ひねって漏れる蛇口が、彼らの口だけとは限らない」

一瞥した百合草の目は次にストラヴィンスキーをとらえてみせる。待ってましたで指を立てるストラヴィンスキーに、笑みはいつも通りと浮かんでいた。

「まさか。また目の前で部屋を吹き飛ばされるような事にはなってませんよ。押収した車と所持品、前科から、四人までの身元が判明しています。詳細は署から送ってもらおうよう手配してありますが……」

言葉を切ると、つい先ほど百合草がデスクへ叩きつけた紙束をのぞき込んだ。

「曾我に配信処理を任せている。全員分、紙束ではもらいたくはないだろう」

察して百合草は教え、うなずき返してストラヴィンスキーは続ける。

「物騒なモノを仕掛けられる前に各自宅周辺の警備を強化。とは言っても彼らが櫛を奪取に来た以上、その彼らを奪いに来る何者かがいるのかどうかこそ疑問ですが。令状が下り次第、捜査に入る予定です。そうですね、遅くとも明日には全て片づく予定です。なんて場合によっちゃあ僕が『ご褒美《プライズ》にサプライズしちゃうかもしれないけどね」

「使用された重火器類についても同様だ」

調子よくまとめあげたところでハートも報告していた。

「マシンガンはともかく、春山のハンドガンにもマエはなかった。奴らも黙りとおすつもりでいるなら入手先については家へ乗り込んでみるのが手っ取り早いな」

「RPGは？」

レフが顔を向ける。

「論外だ」

むっとしてハートは返し、ただし、と付け加えて言った。

「最悪を想定して国内、軍事施設の武器庫流出を確認させている。向こうからの返事待ちだ。しかしあの七人、と言う輩かは知らんが銃床には一部、手のこんだカスタマイズの跡があったぞ。撃ちなれていない人間の握力を考慮した細工だ。マニアも玄人級か、指導する何某が背景にいて知識と装備をくれてやったとしか考えられん。もちろんマニアでないなら指導できる人間こそ特異だと考えられる。特に国内であれば搜索範囲は絞れるはずだ」

「その知識豊富な何某が、お前の逃がした男である可能性についてはどう考える？」

百合草がレフへと振った。

「確かに身のこなしには何らかの経験があるか、訓練を積んで修得したとは思えないものがあった。単に身軽で健脚だと言う程度じゃあない。だがそれが重火器の扱いを指導する

ことの出来る立場につながるか、と言えば」

思い巡らせるレフの瞳がいつとき揺れる。

「断言できない」

百合草へ持ち上げた。

と、柿渋デスクの傍らでドアは開く。

「失礼します。昨日の逮捕者と SO WHAT 関連で逮捕された人物の資料一式、端末配信完了しました」

曾我だ。

「あと、蜂起後の対応について早急の会議が」

百合草へ付け加える言葉に、もうそんなところまで話は進められているのかと百々こそ驚かされる。

応じて百合草はひねった手首の時刻を読み、ついたため息と共に立ち上がった。そうしてこの場を締めくくる口調は至って早い。

「いいか、リーダーと呼ばれる何某と蜂起場所の特定。この二点を急げ。当然ながら蜂起に関しては各国政府機関へも行き渡っている。応援は惜しまない。だが情報源はここだ。そしてこの件で SO WHAT 関連の逮捕者も当局が最多となった。最も情報を握って

いるのは我々だ。ここで掴めないものは他でも無理だと思え。いいか、誰か、どこかを当てるにするな。我々がリーダーを確保する」

そうして置かれた一呼吸に込められた思いは重い。

「各職員には期待している。以上」

身をひるがえした。

隣室へ消えた背を見送るまでもなくきっかけにして、それぞれも動き出し始める。

しかしながら百々に従事して全うすべく「役割」などありはしない。ただ手持無沙汰に不安ばかりを膨らませてゆく。いや何かあった時に知らなかったではすまされないと、送信されたてのファイルを開きにかかった。

「それから百々さん」

その肩へ曾我の声はかけられる。

「残念だけれどこれはチーフの指示だから諦めて」

などと口調は意味ありげで仕方ない。

「百々さんの端末から資料を閲覧する場合、半径、五メートル以内に同じ端末がないとロックされるようになってるわ」

だからして開こうとした画面はみごと落ちている。百々は悲鳴を上げ、ままた接続の切

れた端末をひし、と胸で握り締めた。

「機密事項が多いことは理解できるわね」

言い含める曽我に恨みなど、これっぽっちもない。

「曽我さん」

だが言わずにおれないだろう。

「イジワル」

そしてこれは反省文を書かされていたいつぞやの逆パターンだ。レフは「るるロード前交差点」までワゴンを走らせ、百々はその傍らを埋めていた。

だいたい百合草も誰かをあてにするな、と言っていたはずである。百々さんは意外とアグレッシブだから。ストラヴィンスキーも「ヒッキーズダイニングバー」で認めていた。つまり見るな、と言われてはいそうですか、と引き下がる百々ではなく、だからしてこれは根性でも転送された資料を閲覧するための手段となる。

「どうしてそこにいる」

「あたしには、あたしの仕事があるんです」

言うレフに突き返していた。ならレフはその横顔を一瞥する。ついとばかり百々の握り締める端末もまたチラリ、のぞきこんだ。

「資料を読むなら別の場所でもできるだろう」

だからこそムツとしたのは百々の方だ。画面から顔を上げるが早いかレフの視界へ、不便極まりない端末を突き出した。

「だってこれ同じ端末から離れると資料の閲覧できないんだってっ。どう思う、嫌がらせ？
っていうかそのまんまーっ！」

ついで電波を探すフリだ。前に後ろにかざして回る。

「あー、見えない。あー、読めないよおう」

などと、払いのける素振りすら見せないレフの忍耐力は、極寒の大陸で培ってきたものか。

「読み終わるまでついて来る気か」

ただ確かめる。

「結構、量あるよね。コレ」

加えて難解ゆえに何が何やらさっぱり分からない。口を尖らせ再び百々は助手席へ埋まり込んでいった。

「諦めろ。こっちが迷惑だ」

他に言いようはないのか。思わず百々の目もすわる。

はっと過って、その頬を邪に緩ませていった。

「ということであ、レフう」

投げかけるのは歯切れの悪さもピカイチの猫なで声だ。そんな百々の前で緊急事態でないなら信号も赤を灯し、前にしてワゴンはブレーキを踏む。

「取引っていうのはどうですか？ スタンリー・ブラック監督の話、してもいいんだけどなあ」

聞こえてレフがフロントガラスから視線を逸らした。しかしながらその表情は、相も変わずポーカーフェイスと乏しい。目にした百々の胸の内言葉も「くそう」ともれ、だからこそ沸き上がる闘志のままだった。百々は遠く彼方へ言い放つ。

「舞台挨拶、よかったよねえ」

一変、笑顔でぐいぐい、すり寄っていった。

「ね、ね、意外とファン？ ね」

連呼で絡めばレフの眉間はわずかに動き、見て取ったからこそ粘ればやがて強面の奥から凶星の殺気は立ちのぼる。

鬼の首、取ったり。

言葉は百々の脳裏を駆け抜けていた。ならもう放つのは小バカにしたような、あー、そー、

ふーん、の連続となる。

「あー、そっかあ。ミーティングの前に監督の話したのってさ、そういうことかと思ってたんだけどお。へえー、なんだあ、勘違いかあ。ふーん。はー、へー。そっかー。だったら仕方ないよねえ」

これ見よがしで端末をトートバックへ落とし込んだ。

「もう明日になったら監督のこともすうつかり忘れて、二度と思い出せそうにもないけれど、じゃあこのへんで降りるしかないよねー。降りる。そっかあ。あたしは降り、よーっとっ！」

ドアへ手を掛ける。もちろんその際、背後をうかがう時間を惜しむようなことはしない。

「……分かった」

押し殺した声はそのときついに聞こえていた。

「応じる」

レフは口を開く。

「イエスっ！」

待ってましたの初勝利に、小さく握りしめるのは拳だ。

「なんだ、やっぱり好きなんじゃんっ！」

太陽のごとく満面の笑みで助手席へと座り直す。

「いいから話せ」

前で信号が青へと変わっていた。すかさずワゴンを発進させたレフのアクセルワークは荒い。

かまわず端末を取り出して百々は、ほくほく顔で続きへ目を通していった。同時に明かすのはブラック監督の朗らかな第一印象に、チャージングかつサービスピ精神旺盛な一挙一動だ。さらに日本ツウであることや、舞台挨拶で触れた次回作品への意気込みについてもなぞる。何はともあれほんの一時間、会っただけでも魅了する人柄こそとっておきで、それこそがアカデミー賞ノミネート監督。作品に滲み出ているとおりの人物だったとまとめあげた。調子に乗って写真も一緒に撮ったと明かせば、なぜにかレフからひと睨み食らいもする。

「いい仕事でなによりだな」

確かに、マシガンをぶっぱなされてバズーカーを撃ち込まれる職場に比べれば天と地だろう。だが贅沢極まる現場にもそれなりの杞憂はあったのだと、言わずにはおれなかった。「それは何にも起きなかったからだよ。だいたいさ、プレゼントもバカみたいに多くって、もしその中に S O W H A T の爆弾でも混じってたらって少しは考えたんだよ。なん

と言ってもアカデミー賞ノミネート監督なんだから。世界の巨匠なんでもん。SO WHAT が狙ってとう……」

とたんその目は見開かれる。

同時に世界からいっとき色は抜け落ちて、いやそれほどまでに飛び込んできた閃きは、百々の脳裏で強烈と瞬いた。

「レフさ……」

おかげで呼びかける声も震えてならない。

「ハナさん、なんて言ってたっけ」

様子にレフは突拍子もないヤツだ、と言いたげだ。だが忘れていいような文言でないなら繰り返してみせる。

「予定通りだ。同志。プライズにサプライズ。二十四日、我々は蜂起する」

その袖口を百々はやぶから棒に掴んで揺さぶった。

「プ、プライズって、プライズって、何？」

おかげでレフの眉間はますます詰まり、面倒くさげと言って教える。

「獲得した物。賞だ。知らないの……」

が、そこでレフの言葉も止まっていた。何しろそうだとすれば、それはあまりにも鮮烈

で理にかなった SO WHAT のデビューだからだ。

気づけば百々はトートバックから自身の携帯電話を引っ張り出していた。シフトには覚えがあって、まだ家にいるはずだと確信もある。そうしてつなげた先は田所にほかならず、数コールで電話口に出た田所へとにかくにもまくし立てる。

「タドコロっ！ アカデミー賞の授賞式って、いつっ？」

不躰な質問に、なんだかんだと文句を並べる田所はじれったかった。だがやがて日取りはこう告げられる。

日本時間で二十四日。

「やっぱり、そうなんだ……」

空は雲を流すと、呟く百々をただ遠く見下ろしていた。

映画の都、ハリウッド。

その地で毎年、開催されるアカデミー賞授賞式とは最良の作品とスタッフを表彰するべく式典である。また世界屈指のクリエーターと目にも鮮やかな衣装をまとったスターたちの集結する夢の祭典でもあった。

映画が娯楽産業の中でも巨大なコンテンツであることを示すように、寄せられる感心も

またマーケットに比例した世界中から。どの作品が、どのスタッフが、どの俳優に女優が賞を獲得するのか。様子は本土のみならず諸外国へもリアルタイムで伝えられ、近年ではインターネットによるリアルタイムでの情報拡散も定番となっている。ゆえに賞の行方は映画好きの間で話題とされるにとどまらず、結果は翌日、新聞や昼のワイドショーで紹介されることとなり、受けて一度でも受賞作を鑑賞してみようと考えたなら、それがきめ細やかな報道の証といえよう。

全ての娯楽に粛清を。与えられる楽しみは全て、楽しむことを義務付けられた労働だ。そこに捕らわれた民衆を解放する。

万が一にも蜂起を促すリーダーが会場を乗っ取り、受賞者の声を汲むためのマイクで声明文を読み上げテロを引き起こしたなら。

SO WHAT にとって斬新な作品を娯楽として排出し続けるセレブリティたちこそ望まぬ労働を強いて搾取する団体に違いなく、まとめて粛清するにこれほど合理的な機会はなかった。実行されれば声明文は注目するメディアの数だけ世界へリアルタイムでばら撒かれ、各地に散らばる同士たちも容易くリーダーの意思を確認すると一斉にテロを開始することが可能となる。

与えるインパクトは絶大だった。ゆえに想定される事態は最悪となる。だからこそその確

かさが拭い去れなかった。むしろオスカー像を意味するかのような「プライズ」という言葉が現場はここだ、と言って止まない。

曾我に無理を言って会議中だったところを引きずり出してもらった百合草が最初、この話を聞いて黙り込んだ時間は長かった。もちろん理由は百々にも分かっている。どれほど信憑性の高い話だろうと、現地点では単なる状況判断に過ぎないからだ。そして仮説のみで動くに組織と会場はあまりに大き過ぎ、加えてカラぶりなどと失敗の許されぬ状況がそこへ輪をかけていた。

しかし百合草は頭ごなしと否定していない。預かる、とだけ口になっている。それだけで十分だろう。短い返事を、百々は大きすぎる両者を動かすために時間をくれ、と言っているようにただ聞いた。だからこそ動かすための何かを掴まなければと、結んだ唇へ力を込める。しかし「るるロード前交差点」の一件から三日。現実には予想とおり難航する七人の事情聴取に、核心へ触れることすら出来ずにいた。もちろん百々が進展状態を知ることができたのは不便極まりない端末のアクセス制限を解除すべく、足しげくオフィスへ出向いたためだ。たとえば組織は意思疎通を速やかに行うため、または一定のレベルを保つため、似たもの同士で構成されることが多いと言われている。だがバラつきがないからこそそうした集団には偏りが生じ、盲点、もしくは誰もカバーすることのできない弱点が生じるとも指摘

されていた。ならセクションC.Tの中で百々は特異極まる存在である。誰より本人がそのことを自覚していた。生かして自分だからこそ気づける何かはないか。思い、ひたすら没頭した。

だが成果は進展しない捜査以上パツとしない。日を追うごとに百々の気も減入ってくる。とにかく時間が足りなかった。蜂起の期日もしかることながら週休一日を切る勢いで組まれたシフト、映画「バスボム」のロードショーも近づいている。このまま「20世紀C I N E M A」が繁忙期へ入れば百々が専念すべきはアルバイトに違いなく、資料にすら目を通すことはできなくなると知れていた。

そうしてついに訪れたロードショー前日。百々はまたもや目が死んでいますよ、とストラヴィンスキーに顔の前で手を振られる。

経て連れ出された最後の家宅捜査は彼の気遣いによる特例で、おかげで百々に生気が戻ったかといえど確かに刺激的だったと答えるしかない体験は、のちも百々の記憶に残る出来事となる。

「あ、スミマセン」

アパートは今にもゴキブリが出てきそうな二階建ての木造だ。気にせず職務に励む鑑識

諸氏は台所、トイレ、風呂場、数少ない家具の中でも折り畳みの小さな机やチェストから必要なものを手際よく採取しつつ写真を撮っていた。

眺める百々とはといえば、それら動きだけは邪魔すまいと居場所を求めて右へ左へ体をかわし続ける。

「な、なんだか連れてきてもらって言うのは申し訳ないんですけど」

「はい、なんですか？」

返すストラヴィンスキーもそこに混じると、白い手袋でツギハギ激しいふすまへ手をかけていた。開けた押し入れの上位には布団と衣類が、下段にはつづらよろしく二つの大きな箱が見えている。のみならず吐き出されたのはとんでもない悪臭で、たまらず百々は鼻をつまみあげていた。

「もう少し小ぎれいな所が……。くしゃすぎまう」

前へ鑑識職員はマスクを差しだす。

「ありあとうございまふ」

受け取り、撮影が終わって引きだされた箱を見た。そこにフタはなく、中にはモデルガンとそれらを使用するさい装着する各種防具一式が乱暴に放り込まれている。

「何も実弾でサバイバルゲームのオフ会することないですよ、ホントに」

それが強襲をかけてきた七人のつながりだ。そんな彼らは実銃の出所に SO WHAT

「すごい量」

中へもシャッターが切られ、終わったことを確認したストラヴィンスキーが、一丁づつ取り出してゆく。

「結構リアルな重量感、あるんですね」

グリップを握りなおす顔つきは、まんざらでもない。

「グロッグ、ベレッタ、ワルサー、トカレフ。あ、ありました。これがMP5」

並べ置いたそれへもシャッターは押されてゆく。

「こっちも出していいですか？」

「あ、お願いします」

段取りが分かれば見ているだけこそ邪魔だろう。百々は指さし、得た許可に箱を引きずり出した。手を付ける前、場所を譲って中を撮影してもらい、終わったところでエアガンへ仕込むプラスチックの弾や発射に使用するガス缶を手にとってゆく。多さに途中で鑑識職員へ託し、押入れの中へ頭を突っ込んでいった。

「う、が。くさ」

もう目に染みるほどだ。

だが思いがけず別世界はそこに広がって、百々を釘付けにしていた。

「わあ」

「どうしました？」

「外田さん、見て見て」

呼び寄せる。四つん這いで隣へもぐりこんできたストラヴィンスキーの眼鏡は新調したはずなのに、まったく同じフレームがこだわりだった。押し上げて同様に壁へ視線を這わせてゆく。

「……こういうのを秘密基地、って言うんですよね」

感心するのも当然だろう。押し入れの壁には雑誌の切り抜きからアイドルのポスターまで。映画のチラシに様々な券が。スナップ写真にどこかの地図が。兎にも角にもありとあらゆる個人の記録と記憶がカラージュよろしく一面を埋め尽くし貼られていた。仕上がりは実に濃密で、見つめた二人をしばし無言にさせる。気づけばそれほど広くない全てへ目を通すのに、かなりの時間を要していた。

結局のところその中に、一目瞭然の手がかりは見つかっていない。数時間後、大量のモデルガンと備品、そしてわずかな個人情報を一掴みほど押収して、家宅捜査は終わりを告

げていた。

それは実にあっけない終わり方でもあった。

「ま、一軒も爆発しなくてよかったじゃないですか」

ハンドルを握るストラヴィンスキーはあっけらかんとしたものだ。だが百々が同じように割り切れるかといえば、まったくもって不可能だった。

「そんな問題じゃ、ない、です……」

答えて返す声も何かに押されてこもってゆく。

「あ、もしかして、あのニオイに滅入ってますか？ 酷かったですからね」

察したからこそ言ってるけるストラヴィンスキーは、いわばレフとは真逆だ。だが臭いじゃないなら慰めは屁のツツパリにもならない。

「もしもテロが始まっちゃったら、……どうしよう」

不安が溢れて顔を出す。

「映画館だけじゃないよ。どこへ遊びに行ったって、どんな楽しいことをしようとしても、みんなひどい目に合わされるよ」

全ては数日もすれば現実となるやもしれない地続きの未来だ。

「ないと困るよ。イヤだよ。みんな笑ってた方がいいよ。絶対がいいよ」

訴えれば目の前がみるみる滲んでゆくのを止められなくなる。

「え、えっとですね、百々さん」

などとストラヴィンスキーが切り出したのは、少なくとも彼なりに慌てたせいだ。

「興味深い話を共有しませんか？」

百々へ持ちかける。

「レフがスタンプラー監督のファンらしいってことは知ってますか？」

いやそれはスタンリー監督だ。鼻をすすり上げながら頭の中で訂正して、百々は半べそ
の顔を持ち上げる。

「四年前の映画、二回も見たそうです」

「へえ」

そんなにか、と思っていた。

「どうやら相当に感動作で泣いた、と聞かされました」

「べっ？」

一気に干上がるのは涙でしかない。

「で、どんな作品か気になったもので、僕、調べてみたんですが」

仕事の早さはさすがとしか言いようがなかった。やがてタイトルはストラヴィンスキー

の口からこう告げられる。

「小熊のチェブ」

返す言葉がみつからない。

「ご存知ですか？」

きっと田所なら知っているだろうが、知らない百々は全力で首を振り返した。

「えっとですね、小熊のチェブが成長して老いて死ぬまでと、その縄張りに毎年こぼれ種で咲き続ける花の、もちろんやり取りはないんですけれど交流みたいなものを描いた無声映画に近いドキュメンタリータッチの作品です。ポスターのチェブは小熊でコロコロして、これが妙にかわいいんですけれど、どこが泣ける映画なのか正直、僕には不明です」

「うん、笑いのタイミングも違うみたいだから、きっと感動のツボも違うんだよ」

笑顔で追われた階段室が忘れがたい。

「これ、知らないフリ、しておいてくださいよ」

悪戯気にストラヴィンスキーが微笑みかける。

提案にはもちろんというほかなく、おかげで百々の心配ごとは次にレフに会ったなら熊だか花だかを見て泣いているその姿を想像できずにおれるかどうか、と言うことにすり変わっていた。いや、すでに映像は浮かんで妙なパニックを覚えると、悲観が過ぎた未来は

いつしかそこで途切れる。

気づけばワゴンは国道を走っていた。

ほどなく警察病院の地下へもぐりこみ、「小熊のチェブ」を脳内に抱え込んだまま、ストラヴィンスキーと連れ立ちオフィスへ下りる。

先もって確認したところで百合草は部屋に戻っているらしい。ストラヴィンスキーは報告のため、百々は水谷からもれているシフトのせいですでに了承済みかもしれないが、繁忙期のためしばしオフィスを離れる旨を伝えるべく部屋へ向かった。

エレベータのドアが開けばまっすぐと、今日も通路は一本伸びて、突き当たりで威厳を放つドアが二人を待ち受けている。開けば柿渋色のデスクから顔を上げた百合草は労をねぎらい、無駄を省いて報告を促す光景は浮かび上がった。

なぞってストラヴィンスキーはドアをノックし、引き開けた向こうで百合草もご苦労だったと声をかける。

だが予想と違い一触即発と、そこに睨み合うレフとハートは立っていた。

「裏付けがとれていないだけだ。蜂起の場所はそこで間違いない。その大一番に、こいつを起用するだろ？ 俺は絶対に認めんッ！」

怒鳴るハートの声が百合草へ飛ぶ。

「いいか、この件に次はない。失敗すれば蜂起だぞ。それでもお前は責任を負えるのか」
次こそ、レフへ吐きつけていた。だとしてレフはいつもと変わらない。

「あんたは最初からそうだ。図体のわりに肝が小さい」

「最初から目障りだったのはな、そのしれっとした白いツラだ。そのツラをさげている限り俺はお前を認めん！」

突き立てた指をハートは互いの間から振り払い、失せたからこそ一歩、詰め寄ったレフに瞬きはなかった。

「ここで働くには、あんたの許可が必要なのか」

「やってられん！ こいつをオフィス待機にするか、でなければ俺が降りるぞッ！」

見限りハートが背を向ける。

「勝手な言いぐさはあんたの方だ」

言うレフへ、とたん言語を切り替えた。それが流暢な英語なら、レフもまた呪文のようなロシア語を口にする。それでやり取りがかみ合うのかといえば甚だ疑問で、むしろかみ合わないからこそ口論はまくし立てるが相当と勢いを増していった。果てに互いは飛びかからんばかり額を寄せ合う。

さすがにストラヴィンスキーもこの中央突破だけは無理だった様子だ。回り込むようにし

て向かった柿渋デスクで、形ばかりの報告をすませている。おっつけ百合草へ問いかけた。
「で、どうしたんですか。コレ？」

「ストラヴィンスキー、お前は黙っているッ！」

「そんなこと言われても、困っちゃいましたね」

吐きつけるハートにこめかみを掻けば、叩き割らんばかりそのときデスクへ手は振り下ろされる。

「いい加減にしろ！　ここはお前たちのレクリエーションルームではない。やるなら他でやれ！」

百合草だ。音に百々の体は跳ね上がり、一撃にレフとハートも口をつぐんだ。

一瞥した百合草は何事もなかったかのような面持ちだ。ストラヴィンスキーへ向きなおってみせる。

「蜂起の件で重要な連絡事項が一つ」

切りだされたストラヴィンスキーが背筋を伸ばしていた。

「当局はアカデミー賞授賞式会場をリーダー蜂起の現場と暫定。当日の特別警備を決定した」

とたん百々へ投げた視線にはガッツポーズでも取りそうな勢いがある。だが百々が応じ

たかと言えば気分にくそなれないでいた。それはまたひとつ最悪の仮説が逃れがたい現実に変換されただけなのだ。

「もちろん蜂起についてはこれまで同様、一切が公表されない。会場はもとよりVIPの集う場所だ。ボディーチェックや一帯の交通規制は当初より徹底されている。セキュリティは万全だが、加えて本件の事情を知る人間が当日の警備に加わる方向で現在、調整が進められている」

と、どのセンチンスがひっかつたのか、思い出したようにハートがレフを盗み見ていた。ワケを明かして百合草は告げる。

「その事情を知る者として我々が当日、警備に当たることとなった」

刹那、これでもかと、ハートはレフを指し示す。

「俺は認めんッ！ こいつは必ず他のやつ足を引っ張る。現場を混乱させる可能性があるッ！」

否定しない百合草は、吐き出した息と共にアゴをひとなでしている。答えて返すことを諦めた体はいつもの姿勢を崩して、やがて深く椅子へ沈み込んでいった。そこに先ほどまでの覇気はない。百々にも見て取れる影は疲れと濃く滲み出て、やがてその口は開かれる。「予防、先制はもはや無理だと、被害管理に重点をおいて上は話を進めている。ゆえに対処

策の検討と並行して、責任の所在を求める動きもなくはない」

それは百々が初めて知った百合草の立場でもあった。

「確かに、誰かが詰め腹を切らされたなら通る建前に、スムーズと動く話もある。ならば見切り発車なこの件は空振りに終われば事後、責任を負わせるにうってつけの失策というわけだ。机上の空論で組織が動くからくりはそこにある」

何事かを思い出したか閉じるまぶたで、百合草は大きく息を吸い込んでみせた。

「だが現場はそこで間違いないと、わたしも考えている」

吐き出し開いたそこへ力を込める。

「やり玉に挙げられようが賭ける価値はあると判断した。リーダーは会場に現れる。その瞬間に前回同様、遊ばせておける人員はいない。それが参加させる理由だ」

ハートが本気かと言わんばかりの顔を向けていた。百合草もまた分かっているのかと、レフへ目配せを送る。なら頑なと答えて返すレフのそれは常套句だった。

「逃がすつもりはない」

瞬間だ。ハートの腕がレフの胸倉を掴み上げる。

「……それは仕事で言っているのか、それとも私情でいっているのか」

目の当たりにして百々は息をのみ、いつときレフの瞳も確かと揺れた。

「は、中途半端はどうだ。それで怪我するのはお前だけにしろ。私情に走っていつ反対方向へ走るやもしれんやつに援護される方の身にもなれ。いや、それで俺たちがどうになるなら、それまでだ。だがそのせいで世の中が傷つくとなれば、話は別だッ！」

見逃すはずもないハートに容赦はない。突き飛ばすようにして手を放す。

百々の背後でドアが開いたのはその時で、おそらく何も知らずに入ってきた自分たちもこんな具合だったのだろう、アカデミー賞会場警備の話聞きにひょっこり乙部は顔をのぞかせていた。

「お前より百々の方がよく分かっているッ！」

「何、褒められてるの？」

問われて思わずつのめっていた。

「んなワケないですうっ」

そんな百々へいまいまして、レフが視線を投げている。

だとして百々に非難する気持ちなどこれっぽっちもありはしない。何しろ「中途半端」は自身へあてた言葉にすぎず、そもそもそのとき百々は何も知らなかった。

だが一方で、でなければおそらくレフはああもやっきにならなかつたらうと振り返る。階段室で追い回された一部始終はハートが言うとおり、自分自身へさえはぐらかしてきた中

途半端を突き付けられたことへの過剰反応だ。

だとすれば百々は期待のストッパーで間違いなかった。それも「お守り」ではなく、飛び出すレフを制するための「重り」としてで間違いない。

「ふん、好きにしろ。俺は降りる。もっと話の分かるやつを雇え」

吐き捨てハートがきびすを返していた。

それこそ好きにさせるつもりか。止めようとしないうる百合草にまさか、と百々は目を細める。

間にもハートはドアへまっすぐ足を進め、傍らでやれやれと乙部が道をあけていた。

行かせてはたして代わる誰かは用意できるのか。見つめて百々は否と眉を寄せる。アカデミー賞授賞式までもう二週間しかなく、運よく見つかったとして土壇場での交代劇に必要なチームワークこそ望めそうになかった。

それでも頭が冷えたらハートは戻ってくるだろうか。望みを託し、いやたとえそうだとしてもレフはレフのままで話は解決しないと思う。解決しなければ大一番に太刀打ちすることなど不可能で、だのに状況はもう無理だと言っておれぬところへさしかかろうとしていた。

極まる思いがそのとき百々を突き動かす。

退いた乙部と入れ替わっていた。

ドアの前に立ち塞がる。

前にしてハートは足を止め、向かい合ったそこからワンボックスカーの荷台で食らわせ
たあの視線を投げてよこした。

「どけ」

だとして素直に動くなら、こんなことなどしていいない。

「お店で言ったこと、お前はいい仕事をしてるって、今でも思いますか？」

百々はただ問いかける。

「それともやっぱり、あれはからかっただけですか？」

だが意図をつかみかねているのか、イエスカノーで迷っているのか、石像のように動か
なくなつたハートに返事はない。

「あたしを信用してもらえますか？」

待ちきれず百々はズバリ、突きつける。ハートの分厚い唇は、そこでようやく動いてい
た。

「技術は信用できん。だが心根はあたいする」

これが事実だけに案外こたえる。

「ひ、一言、多い……」

などとへこんでいる場合でこそなかった。

「多いけどっ！ だったら、あたしがレフを見張りますっ！」

発言に、誰もが驚いたことは言うまでもない。だとして引けやしないのだから、百々はかまわずまくしたてた。

「防弾ジョッキだって着るし、今日から走り込むっ！ レフが勝手にどこかへ行こうとしたら引きずられたって行かせないよう、ふ、太るっ！」

というか、その努力はいらない。

「とにかくあたしがレフを見張りますっ！ 自分の言った事に責任持つなら、あたしを信用してくれるなら、降りるとかはずすとか今ここで取り消して下さいっ！ て言うか取り消すまで通さないっ！ じゃなきゃ革命がおきちゃうっ！」

もうありったけの力だ。通せんぼでめいっばい両手を広げた。これでハートも折れるに違いないと思う。いや言った張本人がハートなら納得せざるを得ないはずだと信じて、百々は真っ向、勝負をかけた。

「お、かっこいいね」

目にした乙部も眉を跳ね上げている。これは見ものだと、素人小娘にここまでいわれた

あんたはどうするつもりかと、ハートへ小首を傾げてみせた。

食らったハートのこめかみが、堪えたナニカに痙攣している。かと思えば巨体は揺れ動く、百々の足ほどもある腕は高く持ち上げられていた。

振り払われる。思い百々は目を閉じる。だが拳も何も降ってこな。ただ吸い込んだ息を吐きだす荒い呼吸だけを真上に聞いていた。

「聞いたなッ！ 貴様がドドの顔に泥を塗るようなことをしたなら今度こそ俺はお前を殴るッ！ 覚えておけッ！」

ハートはレフへ吠えていた。

その手は百々の頭へ伸びると掴んで道をあけさせる。それが力づくかといえど、そっと押しのけただけだった。

そして物事の後先は、全てが済んでから考えるからこそ辻褄は合うのである。

「というわけで支配人、二十二日から二十五日までお休みいただきます。あは」

無茶なお願ひ休むに似たり。めいっばいに百々は笑う。前で水谷の顔は、なおさら素っ頓狂と間延びしていった。

「ええつとですね、百々君。と言うわけのところ、まだ聞かせてもらえてないんですけれど

も」

「あ、あれえ？ あたし、言っでませんでしたっけ？ おっ、おっかしーなあ」

などとそもそも話せないことが前提なのだから、とぼけるだけでも一大事である。

「二十五日までとなると、アカデミー賞発表直後までですねえ。万が一を考えると、その日だけでも出てきてほしいんですけどねえ」

「あ、そでしたか。そでしたねえ」

ついに始まった映画「バスボム」ロードショー初日。事務所で二人きり、百々は水谷とヒザを突き合わせる。逃げようにも逃げられぬこの状況で、ついにあの禁じ手を解禁する意もまた固めていた。

「そ、その、親戚のおじさんが、なく……」

が、その手こそ、予定としては使えないだろう。

「なっ、なく、亡くなりそう、なんですすよねっ！ その日に。あはあはあはあは」
身内の不幸をこれでもか、と笑い飛ばす。

「そうですか」

いや、納得するのか。見て取った水谷のため息は大きい。ならこのさいだろう。百々も乗じて頭を下げた。

「すみません」

だが次に水谷が口にしたのはこうだ。

「近頃、あちらさんへ電話しても愛想がないものですから、何かと大変な局面を迎えているんだらうなとは思っていました。そういうことですか」

それは下げた頭も跳ね上がる顚末だろう。というかこの人は一体、知らない間に何度オフィスへ電話をかけているのか。思えば百々の頬は引きつり、前でキラキラ水谷の目は輝き始める。来る。百々が身構えたことはいうまでもなかった。

「という事で百々君、休みにする代わりにその話をですね」

「支配人、それは部外秘ですので、私の口からは言えません」

迎え撃てば、食らって水谷はがっくりうなだれた。

「百々君も、もうすっかり向こうの人みたいですねえ」

参った参った、と放つ笑いで芝居を切り上げる。

眺めていればその無邪気さに、それどころじゃないと言葉は出そうになっていた。だが事実はその時が来るまで知らされず、一番に知るべきはずのちぐはぐは水谷が笑えば笑うほど滑稽を越え、百々の中へ哀れさを募らせてゆく。

「支配人にとってここはっ」

そんなこと許されるはずもなかった。

「『20世紀CINEMA』って何、ですか？」

思えば勝手と口は動いた後となる。しかも唐突なうえに、何と陳腐な質問であることか。だが向けた顔だけは深刻だったらしい。水谷の笑いはそこでピタリ、途切れていた。幾らかの間はあいて、やがて「ああ」と百々へ返してくれる。

「ここは、わたしの大事な作品です」

それもまた突拍子がないのだから、今度は百々が瞬きし返す番だった。

「いや若い頃、少しの間だけです。わたしが作る側にいたんです。制作の一人なんかでね」
照れたように水谷は後頭部を掻き、初めて知る事実に跳ね上がって百々は驚く。あおぎなだめてまあまあと、水谷は話していた。

「最初はそこそこでしたが後は興行的に言ってもこれが大失敗で、誰も知らないような作品がほとんどです」

「でっ、でもっ！」

「まあ、最初のひとつふたつは誰でも無心に楽しいと思えるモノが出来るものです。創る喜びに浸れる夢のひと時です。けれど仕事ですからね。結果を残し続けなければなりません。そのうちに何を撮ればウケるのか。どうすれば注目されるのか。そんなことばかりに

ずいぶん振り回されるようになりましてね。挙句、何がやりたかったのか分からなくなつて、ちょっと荒れた後に、ああ、わたしは才能がないんだなあと。自分の限界を思い知つたわけなんです」

「それでこちらへ、ですか？」

「本物のクリエイターだったなら、悩み続けるべきだったわけですから」

そんな水谷の浮かべる笑みは珍しくもニヒルだ。

「そういうわけでスクリーンと言う場所は諦めました、おかげで今『20世紀CINEMA』と言う作品の制作に携わることができました。働いてくれているスタッフはだから撮影クルーで、大事なキャストかな」

確認するように空を仰ぎ、誰ともなしにうなずいてみせる。

「まあ人間、その気になるだけでは何も変わりませんけど、その気にならなければなかなか変わらないことも事実です。映画の面白いところは泣いたり笑ったりだけじゃなくて、見た人のどこかに響いてその気にさせてしまう。知ってしまったせいでその人の世界を変えてしまうところにもあると思うんです。わたしはそんな感動を残したかった。その点では本編だろうと劇場だろうと変わりはないと思っていますよ。現実、バイトも社員もない皆さんの『その気』には助けられて、いいものが撮れていると実感しています。ここは……、

20世紀は、わたしにとってそんな場所かな」

間違いなしと確かめ、ポンと両のヒザを叩きつけた。

「という事で、そろそろ撮影に戻らないと、まずいまずい」

ままに立ち上がる仕草がそくさと見えたのは、話が過ぎたと照れ隠しのせいかな。それきり事務所を後にしかけて、思い出したように水谷は振り返る。

「休みの件、なんとかしましょう。またあんな騒ぎが起きるのも困りものですからね」
いつもの笑みはそこから百々へ投げられている。

「でも例の話が聞けないのは残念だなあ」

しつこくも、ははは、と笑って靴先は繰り出されていた。

「支配人っ！」

呼び止めた百々の声は大きい。証拠に少し驚いたような顔で水谷も振り返っている。

「絶対、最後まで、最後まで撮って下さいっ！絶対、最後まで撮らせてあげますからっ！」
などと真っ向、言い放てば、これまたバカげたセリフで間違いなかった。だからしてさすがの水谷も呆気に取られたようだ。その時間がどれほどだったかは知れない。だがやがて砂糖を入れたホットミルクのような笑みは、そこに静かと浮かんでいった。

「そうですね。よろしく願いますよ」

取った休みに周囲からのブーイングは相当で、かいくぐりながら過ごした十日余りは予想通りと大忙しの日々となっている。何しろ「バスボム」は平日でも毎上映回がほぼ満席だ。土日など立ち見もでるほどの反響だった。

乗じて数日はあつという間のうちに過ぎ、二十一日の夜、人足の途絶えた「20世紀CINEMA」の正面扉を百々は最後の一仕事と施錠する。

ほんの数日だが、ここへは戻らない。思いを胸にテナントビルを出た。帰り道は途中まで、またバイク通勤の田所と一緒にいた。

いまだ告白の返事も何も肝心なことは話せていない。まるで知っているかのように田所も、休む理由すら深追いしてこなかった。それをぎこちないと感じたのは思い過ぎか。おかげで途切れそうになった会話を懸命につないで百々は、映画「小熊のチェブ」のことを聞いている。

さてこの映画、ファミリー向けの動物映画ととらえられがちだが、小熊のチェブこそ監督で、花は監督の撮影したフィルムかもしれない観客だという見方がマニアの間では定説だという。同じ世界に住みながら双方に接点のないところが問題作らしく、だから悲しいと、泣ける映画だと、田所はつけ加えていた。

きつとレフと話が合うよ。百々は思ったが、それもまた口にしていない。口にしないまま、いつものように田所と別れた。ここでまた会うためなら惜しんだ方がいいと、今でも信じている。そしてまたあの古びた扉を開くためならと、夜空を見上げた。

その暗い空へかけた願いは単純だ。

それでも全ての楽しみが、いつも人々へ門戸を開き続けるように。ただそれだけだった。

赤茶けた大地。

その枯れた色が飛ぶように眼下を流れてゆく。

広がる荒涼とした風景は、砂漠というより荒野がちょうどだ。

切り裂き伸びるグレーのラインはわずか一本。ハイウェイは脇にひとつ、なぞる影を並走させ、落としてシコルスキーは今、CCT職員を乗せアメリカ合衆国ネバダ州、その上空を飛んでいた。

出立ギリギリまで進められた事情聴取と押収物の調査から、強襲者七名はリーダー格となる一人の声掛けに応じて二つのサバイバルゲームチームから名乗りを上げた有志であることが判明している。連絡はリーダー格の一人を中心にパソコンや携帯電話で行われ、彼らは当日まで顔すら合わすことのない他人同士でもあった。

ゆえに爆発物や重火器の入手先、蜂起についてを知るのは招集をかけたリーダーのみと判明し、その押収物の分析結果からもテログループとの接点は、リーダー本人が証言するほかないことも知れる。

しかしながら当の本人をはじめ賛同した有志六人とはといえば、榎同様、二十四日をご褒美とばかり修行僧のようなだんまりを決め込んでいた。

こう着状態のまま迎えた二十二日。ついにオフィスの移動は始まると、オペレーターと曾我、そして乙部がひと足先に現地へ飛び立っている。

遅れること翌日の二十三日。百合草を含む面々は日本を発っていた。

向かったのはアメリカ合衆国カルフォルニア州、ロサンゼルス。さらにそこからほどなく離れたハリウッド地区へ向かったのかといえば、赤い大地が示すように実際は様子を違えている。

知つてのとおりアカデミー賞授賞式は、ハリウッド地区にある「チャダックシアター」で行われることが恒例だった。今回も会場に選ばれていたが、それは開催三日前のことだ。運営委員会は本年度アカデミー賞授賞式会場を、急遽ラスベガスへ変更すると発表していた。変更が、準備を進めていただろう SO WHAT への攪乱目的であることは言うまでもなく、ラスベガスが選ばれた理由には、地続きのハリウッド地区と違い街へ入り込む

ルートがハイウェイ数本とマツキャン空港に限られている点がひとつ。ギャンブルと観光を一大産業に掲げた街が最も重要視している治安維持、それらに対する信頼性の高さが挙げられていた。さらにカリフォルニア州とも時差がなく、すでに組まれたテレビプログラム枠への配慮も必要がないことや、最悪の事態に発展したとして即時対応可能と、街の片隅には空軍も控えている点もまた重要視されている。

しかしながらそんなラスベガスへは直行便だけがない。おかげで数時間かかるトランジットを端折ると、ヘリはこうして飛ばされていた。

荷物は後から届けられる段取りになっている。ともあれそもそも観光でないならオシャレも何も、そこに詰められた物のほとんどが不要だ。身分証と端末だけを携え百々は「20世紀CINEMA」で奔走していた十日間の遅れを取り戻すべく、資料の閲覧に集中する。覚えた疲れに赤い大地を眺めて過ごし、その視線を機内へ引き戻していった。

黙りこくる面々に、気安く声をかけられる雰囲気はない。

乱さず二時間を越えるフライトも終盤に差し掛かったところで、乙部は操縦席から振り返っていた。そうして放たれたうるさいブレード音に対抗するかのような声は、彼にしては珍しい怒鳴り声だ。おっつけジェスチャーで外を見ろ、と促す。

身を乗り出せば前方で、伸び続けていたハイウェイはプツリ、切れていた。その先に忽

然と街は姿を現す。

ラスベガスだ。

機体が高度を下げていた。大きく傾いで右旋回。四方およそ四十キロある街を上空から眺めつつ、マッキラン空港を指し着陸態勢に入ってゆく。

空港よりさらに五キロの位置。ラスベガスのメインストリートであるブルーバードストリートに面して建てられたホテル「メイヤード」は、いわゆるリゾート型ホテルだった。その三十二階スイートルームを借り切ると、臨時オフィスは設置されているという。

「お疲れ様でした」

日本を経ておよそ半日余り。迎え入れてドアを開けた曾我に安心感を覚えるのは、もうほとんど条件反射に近い。

足を踏み入れた部屋はすでに運び込まれ機材が島を形成しており、そこから伸びるコールドが部屋と部屋をつないで床をのたうっていた。オペレーターたちは現地スタッフと共にセッティングにいそしみ、見回し百々たちもこれよりここが二日間、オフィスになることをその身へすり込んでゆく。

「各端末、地元警察、消防、連邦局、管制とシコルスキー、当日、放送局各チャンネル、各

所通信を始め、必要なものは全て集まっています」

通り一遍を伝える曾我を従え百合草もまた、運び込まれた機材のおかげで隅へ追いやられたソファへ足を運んでいた。

「連邦は？」

「現在、空港と主幹道路から監視を展開中。SO WHAT とは別件ですが、その際、四州で手配中の容疑者を拘束したそうです」

付け加えるのは、警戒網が十分に機能していると知らせるためだろう。

「当日は不審者、危険物検知を担当。交通規制、ボディチェックにかかる地元警察と連携を取る予定です」

「中是我々のみか。何かあれば全てこちらのミスというシナリオには変更なしだな」
唸り、どっかとソファへ腰を下ろす。

離れた位置ではハートがブルーバードストリート、通称ストリップに面した窓のカーテンをかき分けていた。並んで百々も見下ろせば通りを挟んだ斜め向かいだ。巨大な噴水を真正面に据え置き、ホテル「ハリウッドプラネット」は見えていた。隣にはシアター「ベガスビッグビューイング」もまた並んでいる。いわずもがな急遽変更されたアカデミー賞授賞式会場はその「ベガスビッグビューイング」で、周辺で急ピッチと進められている式典準

備もまた手に取るように見えていた。

「あれ、だよな」

確かめる声は自然、低くならざるを得ない。言う百々へハートもただうなずき返してみせる。

と、それは百合草だ。

「ギャンブルの街が舞台なら、うってつけの一仕事だ」

声に散らばっていたそこから誰もが振り返る。

「明日、我々が興ずるギャンブルの最終確認を、ここですませておく」
目にした百合草はぶれることなく、ただ前を見据えていた。

「ベガスビッグビューイング」の式典会場でリハーサルを含め全ての準備が終了するのは、明日の正午。

周囲の交通規制はその二時間後、十四時より始められると、あわせて地元警察が指定範囲内へ立ち入る人間のボディチェックを行う予定になっていた。

一方、蜂起の事実を知る連邦局は、それら流れの中から独自の情報を元に危険人物の抽出を行い、有事に陥った場合の外周指揮に備えて状況掌握を続ける。

ボディーチェックをクリアしたプレス陣が沿道を埋め尽くすのは十六時半で、同時刻に敷かれたレッドカーペットは解禁されると、以降ストリップの南北およそ五百メートルはシャットアウト。地元警察と連邦局が立ち入り制限を開始する運びとなっている。

守られて有名監督や女優俳優は続々と現れ、黄色い歓声もひとしきり上がり終えたらう十八時ちょうどだ。式典はテレビ中継と共に開始される予定にあった。

放送は三時間。何事もなければ蜂起の事実は伏せられたまま警備は逆の手順を踏んで解かれ、セレブたちはそれぞれの結果を手に散り散りと会場を離れてゆく。

その中でセクシオンCTが担当するのは準備中の会場内警備に、セレブ入場までの時間を利用した不審物の最終チェック。式典が始まってからは式典会場、バックヤード、舞台袖等に分散した警護だった。

会場内には毎年しかれる警備体制を踏襲し、今年も通常の警備員たちが詰めるらしい。ゆえに、かいくぐってまで何者かが忍び込んでくる可能性は相当に低いだろう、と百合草は語った。しかしながら現れたときは確実に本懐を成し得る強者であることが予想され、蜂起阻止は極めて困難だろうともつけ加える。だからこそ指示は、こうも出されていた。

そうした相手からセレブたちを守れ、と。

確かに文言は正体不明の何某を警戒する闇雲さを払拭し、目的を具体的としている。そ

の明確さは士気を高めると、百々もまた思い出す「バスボム」の舞台挨拶にスタンリー・ブラック監督を、その作品を守るのだと心に強く焼き付けた。

後にとられたインタビューは一時の間だ。あいだ届けられた荷物は臨時オフィスの片隅へ放り込まれ、時間ちょうどに連邦局、地元警察、双方の責任者と簡単な顔合わせを行う。

引き連れられる格好で「ベガスビッグビューイング」へ向かい、会場内警備の責任者へセレブ私用のシークレットサービスだと紹介され中へ足を踏み入れた。

平面図でしか確認していなかった劇場がとたん、周囲へ広がる。その造りは、三スクリーンを所有した平屋だ。カジノがメインゆえ規模はさほど大きくなく、メインロビーの左右にシアターを配置する構造など、「20世紀CINEMA」とどこか似ており妙に親しみ深かい。

見回しながら手分けして、不審物のチェックに取り掛かる。

終了した明け方、外周、バックヤード、式典会場内部を巡回する二十四時間態勢の警備へ移っていった。

百々がテロリストにもまして手ごわい魔物が潜んでいることを知ったのも、この頃となる。

「っと、危なふ」

ついぞ立ったまま眠りそうになり踏み止まっていた。

そんな時刻は現在、午前四時半。日本を経てからおよそ二日が経とうとしている。移動と打ち合わせが立て込んだせいで満足に睡眠が取れていなかった百々の眠気は、まさに頂点を極めようとしていた。

しこうして巨大な船は再び眠りの海へ漕ぎ出しかける。掴んだ頬をこれでもかと引っ張り百々は堪えに堪えた。

「らめら、限界がきてふ」

「今晚には終わる」

返すレフはあくびひとつ、かみ殺す様子を見せていない。

もちろん仮眠には「メイヤード」の部屋が押さえてあったが、レフはその休憩を一番最後でいいと言ったのけ、放って休めるはずもない百々は再び船を漕ぎかけ我に返る。

「ふえ？ なふか言った？」

乙部とハートも今、この足元、通常使用されるシアターの座席を覆って張られた床の下と、その段差を利用して作りつけられたオーケストラピットをチェックしているはずだった。彼らもまた眠くはないのか。

うがるはしから小春日和の窓際そのもの。心地よく遠のいてゆく意識にまたもや百々は

のけぞってゆく。

「だはっ！」

取り戻した意識に取るのは、なぜかしら上段の構えだ。そんな己に悟ることがあるとすれば「もうダメだ」だの五文字だろう。

「あのら、眠くならないコツ、教えて」

乞うたところでレフは振り返らない。慣れ合う気などない。ずいぶと遅れてついでのように、ただ百々へ目を動かしたただけだった。

やりにくい。そう思うのは「お前より百々の方がよく分かっている」、ハートの投げた言葉のせいだと分かっている。階段室にいなかったハートが口にした時から、陰で何を話していたのかと勘繰るレフの様子はずっとこんな具合だった。

ならいっそのことハッキリ問いただせばいいのに。百々は思うが、百々の口添えがあつてのこの場所だ。感謝こそすれレフが問いただして責めるようなことはしなかった。ただこうして、やりにくさだけを倍増させてゆく。

進むリハーサルに周囲は極彩色だ。音楽が大音量で鳴り響き、弾けて白く照明も暴れまわる。

「慣れだ。本土にいた頃なら一週間程度の不眠不休ならよくあった」

思い出したようにレフが答えて返していた。

なるほど。本土と言えば消防士の頃だ。うかうか寝ていれば自分だって燃えかねないだろうと百々は思う。

「ひと月だって燃える火事だもんね」

言っていた。

見回していたレフの目は、そこで止まる。

やがてゆっくりとだ。その横顔は百々へと向けなおされていた。

「どうということだ？」

問うものだから、百々もどうということとは、どうということだろう、と頭の中で反芻してみる。

瞬間、この世の終わりに遭遇していた。何しろ「その話」はレフの口から聞いていない。だというのに「火事」などと、まったくもってしくじっていた。

たちまち持て余していた眠気はじゅう、と体中から干上がり、ぎこちないどころかカクカクだ。動きに不具合すら生じ始めた。

「ど、どういう、ことって？」

「火事だ」

ピンポイントで繰り返すレフに曖昧さはない。

「え、えと？ あと、え、え。言ってなかったっけ？ しよ、消防士だったって？」

精一杯とぼけてみるが、それ以上、回転しているのがレフの頭だろう。

「俺は言っていない。店か。そこで聞いたということか」

「だっ、だったっけ？ う、あ？ その、なんだろう？」

などと場所を明かしたのは、ドアを塞いでハートと対峙した時だけである。よく覚えて
いるものだと感心し、いやそんな所に心を砕いている場合ではないと我に返った。だとし
てどう答えていいのかまるで浮かびやしない。百々はただ目だけを白黒させる。

「お、お店でおごってもらったんだよね」

これでも誤魔化したつもりだった。

「な、何も聞いていないよ」

視線に耐えかね、ついに飛び出した小学生以下の弁解に首を振る。すなわち決着はつ
いたも同然で、レフの目に侮蔑の色は滲んでいった。おっつけその口も何をや言わんと開
いてゆく。

「お疲れ様です！」

遮り、別の声は飛び込んできていた。

「交代に来ました」

分厚い防音扉の前、仮眠を終えたストラヴィンスキーがあっけらかんと手を振っている。姿にレフは吐き出しかけた言葉を飲み、これ以上のタイミングはもう一生訪れないだろう、百々も命の恩人へ手を振り返した。

「た、助かりますう」

おっつけハナも姿を現せば、引き継ぎは何事もなかったかのようにすまされてゆく。その最後は十一時、通用口前集合で締めくくられ、ハナはレフへ仮眠室のカードキーを預けた。つまり残るは同様のモノを頂戴するだけだろう。百々もまたストラヴィンスキーへここぞとばかり尻尾を振る。

「六時間ほどしかありませんが、百々さんもゆっくり休んでくださいね」

だがあてがわれたのは有り難くも、あり得ぬことにねぎらいの言葉だけだ。

「ええと、そのための……、あたしの、部屋は？」

飲み込めず、百々は三段階に分けて首を傾げる。なら答えて返すストラヴィンスキーの笑みは、いつも通りが残酷だった。

「ああ、百々さん。それならレフと一緒にラッキーですよ。ハートとだったらイビキがうるさくて眠るどころじゃないですからね」

しこうして目の前に「メイヤード」の廊下は伸びる。

あれきりレフは口をきいていない。怒っている。思うからこそ百々もしよげて黙り込んだ。
だ。

そんな互いの間に渦巻く空気は重く、すぐにも重いに悪いを追い越してゆく。晒されたなら、なけなしの休憩時間などただの拷問タイムでしかないだろう。でなくとも百々に安眠で
きる道理などないのだから、ドアへカードキーを通すレフを前に、こうも口を開いていた。
「あ、あの、あたし一応、嫁入り前なんですけど」

「俺もだ」

即、返されて戦慄する。何しろその言いぐさをどう処理していいのか分からない。とにかく笑わねば。笑うところだ。己へ言い聞かせたなら、このさい間合いなどどうでもいい。
渾身の力を込め、ブ、と吹き出していた。

「笑うな」

一喝されて伸び上がる。

「ココ、笑うところじゃん!」

捨て置くレフはドアを引き開け、もう部屋の中だ。急ぎ百々も、後を追った。

「てか、お嫁さんは女の子だよ。だからここ笑うところなんだって。そういう意味になるんだって。なのに笑っておかないとレフ、全然、面白いところないよ。てか、あたしの知り限りこれっぽっちもないよ」

水回りにその奥、レフは足元のテレビが典型的なベッドルームへ明かりをつけて回っている。まくし立てて追いかけて百々は、果てに無言となっていた。

仕切りよ生えて来い。並ぶベッドを前に本気で念じてみる。奇跡が起きるはずもないならレフは、手前のベッドへ歩み寄っていた。

「それで終わりか」

胸ポケットから抜き出した端末をマットレスへと投げだす。

「お、終わりです、けど」

「窓際に問題はあるか？」

確認されてすぐさま百々は、不服はないと己が寢床へ回り込んでいた。

「べ、別に。どちらでも」

ならジャケットから袖を抜いたレフはそれも放って、提げ続けた物々しいホルスターをサイドテーブルへ下ろしてゆく。

「何もなければいったん十時に端末が鳴る。俺がいない間に鳴ったなら動く前に必ず呼べ。」

定時以外に鳴った時は必ずだ」

このときばかりは、さすがに百々の気持ちも引き締まっていた。

「了解」

前にレフは腰へ手をあてがう。

「寝すごすな」

他に言っておくことはあったろうか。黙り込んだ後、締めくくるものだから今度こそ冗談だと思っていた。

「だったら起こしてくださいっ!」

だが期待した反応こそ返ってこない。レフはただ大きくため息をついたただけだ。

「疲れた。寝る」

レフでも疲れるのかと聞くうちにも、浴室へと消えていった。

見えなくなっただけでほっとするなど相当だろう。泥のようではなく、もう泥だ。まみれて百々は顔面からベッドへ倒れ込んでいった。

「うい」

変な声が漏れるも致し方ない。寝返りで隣あうベッドへ背を向ける。着替えられるはずもないならシーツをかぶり、彼の有名なマジックワードを空へ放った。

「みんなあ、おやすみい」

瞬間、鳴り響くガラガラ、何をや崩れ落ちる音。

「なにっ？」

飛び起き振り返った浴室から、タオルを手にしたレフが戻ってくるのを目にしていた。様子に百々がぎょっとしたのは、上になにも羽織っていないせいだろう。

「なっ、なんですかつ！」

「狭い」

「……は？」

だから文章で答えてくれ、と切に願う。だが望めずレフはどっかと自分のベッドへ腰を下ろしていた。タオルを持ち上げ念入りに、やおら体をこすり始める。

光景に何の儀式かと百々が眉を寄せたことは言うまでもない。だが次第に思い起こされてゆくものがあつたなら、あの古式ゆかしき健康法に「あ」と口を開く。

「それ……、かんぶ、まさつ」

すなわち確かめざるを得ない、これはいきさつだろう。

「で、張り切って風呂場でぶつけた」

「だったらどうした」

無然と返すレフに引け目はない。

「今、やんなくてもお」

「今日は移動で時間がなかった」

同時に知るのは、昨日も一昨日も毎日やっていると言う事実だ。

だとして別にかまいはしなかった。漢字検定一級取得を目指している地点で何でもありだと思っている。だが状況が状況だ。百々の方が萎えてくる。

「そういう問題じゃないよお。あたしだって寝たいのにい」

「体にいいと教わった」

レフは言い切り、いやそれほど病弱か、つつこみたい衝動に駆られて一体誰がこのしち面倒くさい事を教えたんだと思い過らせる。すぐにも謎はあの禁句にスルリ、解けていた。
「……もしかして日本のおばあちゃんに、教わったの？」

レフがピタリ、動きを止めていた。

何か言ったか。

心の声は聞こえて百々は慌てる。

「て、てっ！ お、思うじゃん。普通っ！」

はぐらかすだけで命がけだ。

「おかしいなら笑え。大事なんだろう」

吐きつけられて表情を無くしていた。

「店でどう吹き込まれたかは知らないが、つるし上げて盛り上がったか？」

言葉こそ、劇場で言いそびれたものに違いないと思う。

「そんなじゃ、ないよ……」

「どうせ誰もが知っている話だ。自分の噂も聞き飽きた」

吐き捨てたレフは日課を再開させている。淀みない手つきはそれだけで話は終わったとも告げていた。だがこんな所でおしまいになされてはかなわないのは百々の方だ。

「ハートがさ、ハートが知らずに危ない橋を渡れるヤツがいるかって」

咄嗟に口を尖らせる。

「あたしにも知る権利はあるって……」

端から、自分ですら気づく言いわけ臭さに閉口した。

「そうか」

気づいてレフもサラリ、かわしている。それでいて正論もまた百々へと投げた。

「死活問題ならだれもが神経質になる」

「それでもここがいいわけ？」

問わずにはおれない、それこそが理屈だろう。

「逃がすつもりは、ない」

理由はあまりに単純で、単純過ぎてむっとするのは、それはここにいる誰もが同じだと思うからだろう。

「あたしだって……、あたしだって帰ってまた20世紀でバイトしたいよ。そのために絶対逃がしたくない。技術は信用できないが心根はあたいするってハートに言われたじゃん」

蒸し返そうとも、もう怖くなかった。

「けど心根だけでテロリストとなんか戦えっこないから、あたしこそ影で色々言われてると思うよ。なのに見張るって言ったのが通ったことは奇跡でさ、浸ってぼんやりしたくないから自分の事、みんなが納得して誰も怪我しない方法担当、とか考えることにした」

さすがにイタイ話だとは思えない。

「だって見張り役って言っても結局、ただのお荷物だもん。そのまんまじゃ辛いよ……」

その通りと、中途半端で引け目の塊こそ自分の方で間違いなかった。けれど甘んじてグズっていられるほど子供でもなければ、場合でもない。笑われようと出来ることをしたいだけだと思いは募る。

「仕事でも私事《ワタクシゴト》でも、捕まえてくれたならそれでいいって、あたしは思う

よ。できるのはあたしじゃなくて、レフだよ。みんなだよ」

そう、手段に体裁なんて後付けの、緊急事態が今だった。

「おばあちゃんのこと聞いて信用できなくなったから見張る、って言ったわけじゃない。捕まえたいから、だからみんながここへ来れるようにしたかった、それだけだよ」

だがレフは何ら返してこない。スネる態度は頑なで、閉じた百々の口も次第にへの字と曲がってゆく。ままに眺めれば眺めるほどだった。このままではハートの言う通りになりかねないと危機すら覚える。それでも逃がすつもりはない、と言い張るレフに、怒りさえ覚え始めていた。

「って、仕方ないじゃんさ」

古今東西、言わなきやわからない相手へは、言ってやるほかないのである。

「ダメって言うのにレフが勝手なことしちゃうんだもん」

その地雷原、駆け抜ける姿は採掘場のヒーローか。

「その上、チーフの前で喧嘩まで始めるんだから。やっぱりねって噂に陰口が出るのも分かるような気はする。今だってヘソ曲げちゃってさ。自分のことばっかじゃん。みんなも困るよ」

お前はすでに死んでいる。

百々の脳裏に、あの名文句すら蘇っていた。

「なっ、なんて、とにかくここへ全員、連れて来ることができたからには、ちゃっ、とりーダーを捕まえて、すっ、と全員、無事に帰ってもらうことがあたしの目標なんだよねっ」
付け加えてみたところで、果たしてそれはフォローになっているのか。

「そのためにも振り払って独走はなしだよ。ここは担当の言うこと、ちゃんと聞いてお仕事しようねっ！」

良い子とお姉さんとの約束だよ。うふふ、あはは、おほほ、で笑った。レフが見向きもしないなら、えへへ、いひひ、でとにかく笑いに逃げる。いや笑えない状況にだからこそ、死にも狂いで百々は笑った。挙句、黙々と乾布摩擦を続けるレフに放置されて、切り上げるタイミングをことごとく見失う。

失せても笑えば、続く無理に一人むせた。

むせていることにむせてのたうち、ゼイゼイ涙目になったところで果たして自分は何をしているのだろう、正体不明に陥りかける。

「バーブシカは」

「あひ？　ばおばぶ？」

いや、それは木だ。

「ロシア語が話せない」

言う声を聞いていた。

「話せたとして、話したくなかったからだ。寂しい人だったと思い出す」

乾布摩擦をやめたレフの手は、いつしかヒザの上にあった。光景に何が始まったのか、百々は最初、理解することが出来ていない。

「だから俺に日本語を教えた。週末の話し相手は大事な役目だ。バーブシカはそれを楽しみにしている」

そこでようやく咳はおさまり、巡り始めた血に百々は「バーブシカ」が祖母であることを汲み取っていった。

「入隊を決めたのは祖国に貢献するためだ。紛争地へ赴きたいわけじゃない。だが兵隊はよくないとバーブシカは止めた」

くだりが早くも嫌な予感を過らせていた。だが口を挟める余地はなく、レフも己が記憶へ深く埋もれてゆく。

「俺は自分を通した。おかげで話し相手をなくしたバーブシカは誰にも会わず家にこもった。年寄りのささやかな楽しみを奪った。そうなることは分かっていた。悪いことをしたと俺は思った。なら代わるものを探すことも役目だ。夏で表は明るい。美術館なら言葉も

いらなはずだと考えた。とりわけ庭が美しいと聞いている。気晴らしにはうってつけだと、俺は思った」

果てに像はひとつ、百々の中に立ち上がってくる。

「俺はバーブシカに、美術館のチケットを贈った」

忘れはしない。ハートがまた、ばあさんは庭園美術館で宮殿施設ごと焼けて死んだと繰り返した。

違わずレフも、それをなぞる。

「年寄りの言ったことには、従うものだ」

言葉は鉛のように重かった。

「年寄りには、大事にすべきだ」

後悔と語るにそれは、枯れ果てていた。

なら向けられていた背はやおらねじれて、薄い色の瞳が百々を捕らえる。

「正しい話はこれが全てだ。最大限、協力はする。覚えておけ」

百々にその目を逸らすことはできない。だからか。ひとりごちていた。バスの彼女に無理強いしなかったワケも、逃がさないというあの口癖も、この日課も、漢字検定さえだろう。妙なこだわりの全ては弔いであり償だった。だからこうも振り回されてやまず、煙た

がられるほどにこだわる。その姿は捨て去り逃げたと見せつけて舞い戻ったあの主人公そのもので、いつ吹き飛ばされるやもしれない危険にさえ満ちていた。

嫌い、ハートは胸倉を掴み上げている。

引かないレフはそんな自分に気付いていない。

もっと冷静にならなきゃ。

最後の最後で選択を誤る脆さを放置して、全員が帰れるわけこそあり得なかった。だのにその瞳は百々が「わかった」とうなずき返すのを今もなお、そこで待ち続けている。

タフなら笑え。

睨み返して百々は念じた。

今夜にも闘わなければならぬのだ。逃さないつもりだと言うなら「それっぽっちの」と笑い飛ばして、今こそ振り回されぬ距離を取れ、と思う。

もちろんそこには人の死が、身近な者の死が絡んでいることは分かっていた。そう容易く笑い飛ばせやしないことも十分承知の上である。けれど、だからこそだった。

タフなら笑え、と百々は思う。

無理にでも笑ってまとうのは余裕というやつで、不利になればこそ笑ってしのいできた百々だからこそ言い切ることはできていた。

ならふつつと湧きあがってくるのは、これが闘志か企みか。自負する業務にかけて今すぐだ。今すぐその湿気た顔を笑わせてやる。百々の腹へ力はこもる。ハートも白い面はぶん殴るに限ると、脳裏で百々をけしかけていた。

だからか目に入ったソレにこれでいいのか。戸惑えども、ほかには何もないのだからやるしかないで意も固まる。

レフを睨み返したままだった。指をそうっと伸ばしてゆく。企んでいるのだから予告などしてやらない。傍らに転がる枕を掴み上げるが早いか百々は、レフ目がけて投げつけた。「なんだ」

食らったとして、枕ごときにレフは無反応だ。問われた百々にも理屈などない。

ただ二つ目を投げつける。無防備と受け止めたレフの体で二投目は跳ね上がり、初めてむっ、とレフが眉間を詰めてみせた。

などと面持ちが真面目であるほど滑稽なのはこういうワケか。百々の方こそ無性に笑いがこみ上げてくる。まさに三つ目を掴み上げた。ぼうん、とベッドへ跳ね上がって立つ。

「なんだって、決まってるじゃんっ！」

そうして突きつけるのは人さし指だ。

「修学旅行の夜って言ったらさ、枕投げだよっ！」

提案に、さすがのレフもあっけに取られたらしい。目がけて百々は三つ目を振り下ろした。

「スキありっ、でえやあっ！」

避けるレフが身を縮めていた。

「お前は人の話を聞いていたのかッ？」

跳ね返ったそれを百々は拾い上げる。

「聞いたっ！ 覚えたっ！ だからものすごく、やりたくなっただけ！ せえいやああっ！」

「わけがわからんッ。どういうッ」

「どうもこうも、なあいつ！」

などと投げつけるほどにテンションが上がる、このお手軽さ。まかせて百々はベッドを飛び下り、レフの枕へ手を伸ばした。気づいてそこまでやるかとレフは阻止にかかるが、動きがまるで間に合っていない。

「たりやあっ！ てえやあっ！」

右に左だ。その顔目がけ気合いもろとも投げつけた。ならこの近距離で一投目を避けるレフの反射神経はさすがだろう。だが避けきれなかった二投目はいよいよ、その顔面へめりこむ。うぐ、だか、むぐ、だか、くぐもった声は確かに聞こえて、やがて短い前髪をつぶ

したレフの顔はのぞいていた。目にして百々はたまらずブツ、と吹き出す。

「その顔、もう最高っ。今の写真、写真だよっ！ みんなに配信だよっ。なんたって噂のレフアーベンだもんねっ！ いやー、もう一回、見せなさいっ！」

放つ百々に何かが吹っ切れたとするならその時だろう。翻弄されていたレフの目へ見る間に力はこもってゆく。やがて怒りのオーラか反撃ののろしか、背にもわり、それは立ち上がっていた。

「人の大事な話を聞かない、そのバカ面こそ……」

「おや、やる気、できましたか？」

そそのかす優越感がたまらない。

「配信しろッ」

否や枕は百々めがけて飛ばされる。

「ぎゃあ。って痛くなあいもんっ！」

食らえば交戦開始だ。己がベッドへ身をひるがえした。その背へヤケクソと、レフも枕を投げつける。

「このトンチンカンがッ」

「ひっ、ひい。大事な話をするときは、ちゃんと相手を見極めなさいっ！」

僅差でかわして、べろべろばーだ。ベッドの向こうから百々は手を振り返した。

「ウル、サイツ」

目がけてレフは腕を振り下ろし、掴んで投げ返せば入れ違いで飛びくる枕に顔面を弾かれる。負けるもんかで披露するのはサイドにオーバー、アンダースローだ。右へ左へ。上から下へ。互いに枕を飛ばしに飛ばす。

おかげで叩きつけられたカーテンが揺れ動き、食らったテレビが迷惑そうに角度を変えた。電話横のメモにペンも跳ね上がると、どこぞへ消えて電気スタンドが倒れる。

やがて戦闘は避ける面倒を省いて接近戦となり、食らった相手の無様を笑った。食らわされて腹をよじる相手へ闘志を燃やす。尽きぬ攻防はエンドレス。繰り返すほどに息もあがって、大人だろうとスポーツしながら枕投げ万歳だ。

と、前線も佳境にさし迫ったその時だった。不意に電話のベルは鳴る。待て、と制したのは息を切らして手を突き出したレフで、端末でないのだからフロントからだ、枕元の受話器を取り上げた。

「なに？」

投げ損ねた枕を胸に、百々も電話口へ顔を寄せる。二言、三言で受話器を戻したレフは、つい先ほどまでのピローファイトが嘘のような真顔だ。

「隣の部屋から悲鳴が聞こえた」と連絡があつたが、おうかがいした方がいいかと聞かれた」なるほど、いい年をして枕投げで怒られてみる。貴重な体験に冷めゆくスピードはシベリア超特急並か。思い出したように飛び散った枕を、ふたりがかりで集めにかかった。

「お前の声大きい」

「自分だって、なんかわめいてたじゃん」

「クソ。もう六時だ。寝る」

「あ、また無視っ！」

ともかく、跳ねて暴れたほうがよほど長いベッドへ横たわった。手のひらをかえしたような静けさはとたん百々の耳を刺し、あまりの落差に眠るところか目は冴えて、数分耐えたところで本当にレフは寝たのか、チラリうかがう。

そこでレフは直立不動と、棺桶にでも入っているかのような姿勢で横たわっていた。これが目を凝らせば凝らすほど不気味に見えるのだから尋常ではない。よもや死んでいるのでは、と思ったとたん、ガバ、と上体は起きあがった。

「なにっ！」

「興奮して眠れなくなった」

死ぬほど驚かしておいてレフは言う。

「枕投げ、好きなんじゃんっ」

聞かかずレフは浴室へ姿を消し、シャツを羽織って戻るとホルスターを担ぎ上げる。続けさま袖を通したジャケットの内ポケットへ端末もまた落とし込んだ。

「どこいくの？」

ベッドの隅で靴を履く背は丸い。

「そのうち戻る」

眺めたなら百々の口から自然、言葉はこうもれ出していた。

「これが終わったらさ」

いい提案だと思ったのだ。

「レフ、ウチへ映画、見においでよ。ブラック監督の新作も始まってるし、サイン、おいてるよ。小熊のチェブに詳しいスタッフもいるんだよね。絶対、話が合うよ」

しかし忘れ物はないかと辺りを見回すレフの問いは、鋭い。

「どうしてチェブの事を知っている」

「がは」

なんだかももう知ったことではなくなっていた。

「もういい。終わったあとで考える」

打ち捨てレフも言い放つ。

出てゆくドアの音が、離れた所でガチャリと鳴っていた。相変わらず愛想のない返事だと聞いて百々は、寢床から見送る。そうして安心したのではなく、安心させられたからこそだろう。それきり途切れた意識に、急転直下で眠りについていてた。

夢を見た覚えはない。眠りはほんの一拍、手を叩いたかのような間合いで終わりを告げている。

鳴りだした端末を握りしめ、百々はこれでもかと思えば体を伸ばしていった。

午後にも式典が始まるのかと思えば眠いなどとは思えない。こすっただけでクリアになる視界同様、意識もまた覚えた軽い興奮と共に覚醒してゆく。

あの後レフが帰ってきたのかどうかを百々は知らない。ただ隣り合うベッドはカラのままで、水回りのどこにも姿はなかった。

代わりに誰が運び入れたのか、オフィスへ放り込んでいたスーツケースは部屋の隅にあり、上にミックスサンドとアップルジュースの紙パックは乗せられている。隣にはシルクか。しなやかな光沢を放つ詰襟の服もまた引っかけられると、メモはそこに添えられていた。

歩み寄ってつまみ上げる。

DRESS《ドレス》 CODE《コード》

読んですぐさま詰襟を広げていた。目の前に花や小鳥の刺繍は鮮やかと広がって、ベトナムの民族衣装、アオザイだと知らされる。下には真っ白なパンツもたたみ置かれ、持ち上げたところで防弾ジョッキは現れていた。

仕方ない。目的が目的だ。ひとまずアオザイをベッドに広げ、眺めながらパンを平らげる。顔を洗い、スーツケースから引っ張り出したキャミソールに着替えて、その上から防弾ジョッキを着けた。IDと端末はいたパンツのポケットへ忍ばせ、イヤホンのコードを処理したところでアオザイをかぶる。足を入れたバレーシューズはベッドの下でミラーボールかとビーズを光らせていたもので、すっぴんでは気が引けると軽く化粧を乗せた後、髪をひとつにまとめ上げた。

いくらID作成の際、身体特徴込みで事細かと登録したにせよ、用意されていたどれもが身にぴったりでむしろ気味が悪い。確かめ立った鏡にシルエットは防弾ジョッキのせいではなく、アオザイを割烹着に変える勢いだったが、馬子にも衣装。仕上がった己へ

微笑みかける。時計へと振り返った。

そこで針は十時四十分を指している。少し早いだろうか。吟味して、いや、ちょうどだと端末を手に取ったところで部屋のチャイムは鳴っていた。

誰だろう。恐る恐るドアを引き開ける。

何のことはない。そこには呼び出されることを知っていたかのようなレフが立っていた。
「準備は出来たか」

挨拶もないまま用件だけを切りだす様はいつもどおりで、百々もそれでいいと思う。だがあまりに違い過ぎるいでたちは、百々を面食らわせてもいた。何しろ会場内警備につく者としてドレスコードはお互い様だ。準じて気持ち髪へもクシを通したレフは黒のタキシードを着込んでいた。これが似合い過ぎていて、怖い。おかげで百々の脳内を三ヶタのコードネームを持つ某国のスパイなんぞも過ってゆく。

「リハーサルが予定より早く終わる」

「い、今、ちょうど声かけようと思ってたところ」

乗じてテーマソングさえ鳴り始めたところで、ジャックごと引き抜き阻止して返した。

「もう全員、現場だ。行くぞ」

「了解」

ノブを握り振り返る。

やおら次にここへ戻った時は、と考えていた。

まさか、心配するなど早すぎるだろう。

断ち切りひと思いとドアを閉める。

きびすを返したレフを追えば廊下でエレベータは止まったきりと待っていた。乗り込みロビーへ降りる。式典のせいかロビーは昨日にも増して賑やかだ。やり過ごして表通り、ストリップへと出た。

一年の七割が晴れだというだけはあつて風が熱っぽい。抜けるような空もまた、視界一面に青を投げた。

交通規制はまだ始まっていないらしい。その準備を進める地元警察の姿がところどころに確認できる。敷かれた赤いカーペットはそれら物々しさの中央に見え、挙げた手でレフがストリップを横断していった。そうして辿り着いた「ベガスビックビューイング」の正面入口は、昨日までなかった生花に豪勢と飾り付けられ巨大なオスカー像のレプリカを立てている。

求められるがまま身分証を示していた。

パラボナアンテナを広げる報道中継車を片側に、裏口へと回り込む。

開放された「ベガスビックビューイング」の通用口前は、セキュリティーチェックのため、臨時テントを張っていた。下には長机が広げられると、探す顔もまたそこに見つける。気づいたらしい。レフも歩調を速めていった。

「遅くなった」

「大丈夫だ。ハナがまだリハーサルに立ち会っている」

ハートだ。振り返っていた。

前へ百々も急ぐ。

「遅れてすみません」

とたん笑みを浮かべていた。

「あは、袖がある」

当然ながらハートもまたタキシードだ。

「ええい、これだと動きにくくて仕事にならん」

悶える様は慣れぬ首輪をつけられた犬のようで、そのとき通用口からハナは姿を現していた。

「リハーサル、終わったわ。異常なしよ。今、スタッフの撤収も完了した」

その姿は百々と色違いのアオザイだ。だが出るところは出て、引っ込むところは引っ込

んでいるのだから何かが違っていた。

「乙部さんは？」

全員そろっている、と聞かされていたはずである。ならハートへ申し送りをすませたハナに上空待機、とさし示されていた。なるほどそれが得意分野なら乙部はいつも別行動だ。と納得した百々の目に、その人物は飛び込んでくる。つまりこれこそ役得の極みか。礼服姿の人はいずかたの貴公子か俳優か。スラリとした立ち姿に涼しげな目元でテントの下、警備員と談笑していた。しばし見とれて、あんなところに俳優さんがいるよと、百々はレフの背を突つつき知らせる。

「何を言っている。あれはストラヴィンスキーだろう」

「おい、ストラヴィンスキー、始めるぞ！」

振り返ったレフに言われて、瞬きする間もなくハートもまた呼び止めていた。

「あ、百々さん。おはようございます」

なら違わず振り返った貴公子も、確かと百々へ手を振り上げてみせる。

瞬間、百々のアゴは抜け落ちていた。

「うそ、ら」

受け止められたのはもう奇跡の所作だろう。

「そ、外田さんっ、めっ、眼鏡はっ？」

どうにか所定位置へはめ込み、その勢いで目玉をひん剥く。

「あ、恰好がこれなんで不釣り合いかなと。今日はコンタクトレンズにしてみました」

などと教えて投げる笑みはいつも通りだ。だが今日に限って分厚いレンズがないぶん隠れていた瞳がキラキラ、これがもう相当に眩しい。焼かれて百々は昇天しそうになる。またもやハートに呼び止められていた。

「おい何をしている。始めるぞ」

確かに今重要なのは、そんなこんなでめかしこんだ互いの姿ではない。

やがて通信のチャンネルチェックは始められ、全員で施設内の警備区分に誤認がないかを詰めたおしてゆく。外周も含めた警備のタイムテーブルを確認し合い、さらには蜂起後の対処手順を数パターン、外周警備との折り合いを兼ねなぞっていった。

「現在、蜂起についての情報はまだどこからも上がってきていない。空港、モノレール、四方高速道路、各遊興施設、市内配備ポイント、全てにおいて異常なしだ」

イヤホン越し、語る百合草へ誰もが耳を澄ます。

「渡会には蜂起会場はアカデミー授賞式かと話を持ちかけることでリーダーの様子をうかがうよう申し出たが、反応すら得られていないというのが現状だ。ただし個人的見解だと

付け加えたうえで渡会は、黙りすぎるも雄弁な語りの一部だと言っている。最も話せない内容がその辺りにあるんだろうというのが彼の勘だ。可能性は十分あるとみていい。あと、これが終われば家族サービスをねだられているのでよろしく頼んだ、とも伝言を預かってきている」

意味するところは大きい。

「いうまでもないがこれは世界中に生中継されるプログラムだ。中でも最も危険が予測されるのは視聴率が最高となる作品賞受賞の瞬間とみている。それで事実を隠しとおせるとは思えないが、最悪の場合カメラはこちらで切り替える準備があることを忘れるな。そのためにも勝手な行動は各自、慎むよう強く言っておく」

ちらり、ハートがレフを盗み見ていた。その目を百々へも裏返す。気づいて百々も自分でもらしくないと思うほどだ。自然にウインクして返していた。

「これより施設内の最終チェックに入る。式典スタッフの再入場は十四時。不審物が発見されたとして処理を含め、行動は招待客到着の十六時三十分までが鉄則だ。招待客の安全を確保。式典を無事終了させろ。以上」

瞬間、宙で皆の視線はかみ合う。

すかさず駆け寄ってきたテント下の警備員に中へと案内されていた。

しばらくは出ない。

そして出るときは全てが終わった後だと、強く意識する。まさに「ベガスビックビューイング」へ足を踏み入れていった。

そのバックヤードは土地柄だろう。頻発するイベントに大型宣材も運び入れられるように広い。足元には冷たげなりノリウムが敷き詰められ、濡れたような光を反射させていた。

向かって左手には倉庫や事務室、従業員用の手洗いが並んでいる。右手には式典会場となるシアターの壁面が連なり、舞台袖に当たる場所へは一枚、扉もまた取り付けられていた。出入りしやすいよう開いたままで固定されたそこには今、底上げされた舞台へ続くスチール製の階段もまたのぞいている。

ストラヴィンスキーとハートは警備員らと共に、別れてそちらへ潜り込んでいった。レフとハナ、そして百々は残る警備員たちに引き連れられ、さらに通路を奥へと進む。突き当り、現れた鉄扉を潜り抜け、曲線が優美なアールデコの空間へと出ていた。

飾り付けられたロビーの右手には変わらずシアターがあり、等間隔で三か所、革張りの防音扉は並んでいる。だが現在その二つは百々の背丈以上もあるオスカー像のレプリカによって塞がれ、最もエントランスに近い扉だけが開かれていた。

傍らにやり過して足を進め「20世紀CINEMA」と違う意味でレトロな造りがゴー

ジャスなエントランスへたどり着く。表通りから引き込まれたレッドカーペットはそんなエントランスを二つに裂いて伸びると、正面奥のチケットカウンターの折れ、開く防音扉の中へ吸い込まれていた。ファラオのごとく巨大なオスカー像のレプリカは、それら光景をエントランスの両側から見下ろし立ってもいる。

舞台周辺を確認したハートたちはバックヤードを点検後、封鎖されている残り二シアターの片側をチェックする段取りだ。一方で百々たちはエントランスと式典会場内を洗ったあと、封鎖された残り一方のシアターを確認する予定にあった。

この敷地面積を考えたなら時間は短いように思えてならず、しかしながら手を抜くことなど許されない。集中するほど時間は短く、あっという間に過ぎ去った十四時。さかいにして表で開始された交通規制は知らされていた。同時に施設内の明かりは常灯へ切り替わり、テレビクルーたちが礼服姿で再入場を始める。

そんな彼らに追い立てられるようにして終えた施設内の最終チェックはオールクリアだ。持ち込まれ、何かしらコトが起ころうとするなら以降、ここへ足を踏み入れた何某によるものだとターゲットは絞られる。

やがて十五時。百々とレフだけを対にして舞台袖、バックヤード、エントランスへとそれぞれは散開していった。

もちろんまだ式典は始まっておらず、時刻は視聴率のピークすら程遠い。だが慣れぬ百々の緊張はそのときすでに頂点に達して、解けることなく十六時は訪れていた。

さかいにして百々とレフは、エントランスのハナと警備を交代する。一望できる場所を探索と荘厳なオスカー像の足元に立った。

そんな百々の耳へも伝わるストリップの騒がしさはプレスだ。セキュリティをパスすると、少しでも良い場所を取るべく陣取り合戦を繰り返している様子だった。

だが警戒すべく情報は、いまだどこからも上がってこない。ただ大きすぎる刃物を持ち歩いていた何某がつまみ出され、何某が所持していた薬物が発見されて世間が一ミリばかりクリーンになっただけに止まっている。

これ以上なにも起こらず、だというのに突然、何者かが襲いかかってきたなら驚きのあまり卒倒してしまうのではないだろうか。不安に百々はただ頬を強張らせた。

「そんなに緊張するな」

数時間ぶりにレフの声を聞いて振り返る。

「伝染《ウツ》る」

しめくくられて、つんのめった。これが上半身に余分な重みがかかっているせいで、踏みとどまるのも一仕事だ。

「じゃ、離れてます」

仕方ない。しょげて百々は背を向ける。瞬間レフの手は襟元のマイクを握りしめていた。「お前の励まし方は分かりづらい。だが緊張は分かりやすい。いいか、体が固まれば咄嗟の動作は不利になる。放ってゆけないなら、いざという時に俺が困る。俺はハートに殴られるつもりもない」

正面へ向きなおると、握っていたその手を離れた。面持ちはまるで何事もなかったようなあんばいだ。

自分こそ分かり辛いじゃないか。一部始終に啞然としてのち百々は心の中で吐いていた。余裕がないのはお前も同じだ。そういうことらしい。つまり今朝の奮闘はちゃんと伝わっていたのだと思い返す。なら今度は自分の番らしく、だが言われたところで枕投げどころか、現状、口笛ひとつ吹けそうにもなかった。

諦めるか。思い過ったところで「あ」と閃きは訪れる。否やチラリ、レフへ視線を投げていた。おっつけ百々は体ごと向きなおる。

「じゃ、しりとり、お願いしますっ」

そのさい下げる頭は、ごっつあんです、が相当だ。

「つき合わせるな」

早い。返事が早すぎて取りつく島がなさすぎた。だとして負けておれまい。無謀だろうと最初の一語をレフへと投げる。

「しらすっ!」

聞いていなかったのか、と噛んだ奥歯にレフのこめかみが窪んでいた。緩んで言葉は、やがて低く絞り出される。

「……スジコ」

ロシア人ならイクラじゃん。しらすから始める変化球もどうかと思うが、つつこみかけて「やめなさい」と曾我に叱られていた。謝れば苦笑いはもれ、わずかながらも体が軽くなったように感じ取る。「日本酒でつまみたいですね」などとストラヴィンスキーも付け足していたなら、自分だけの問題ではなかったのかもしれないと感じていた。

そうして訪れる十六時三十分。「ベガスビッグビューイング」の正面扉は開かれる。

待っていたように「ハリウッドプラネット」噴水前へリムジンは次から次へと到着し、中からなうての俳優にスタッフ陣は続々、姿を現した。

ついに始まる。

いやもう、始まっていた。

ならば来る者は拒まず、そして来たからには必ず制する。過る思いを抱いて百々は、ス

クリーンから抜け出たような有名著名人へ目を這わせていった。だがなんら動きは引つかからず、元より場所を間違えたのかその兆候さえ上がってこない。

十七時三十分。社交場と化したエントランスは着席前の招待客で大盛況と賑わい、どれくらい時間をかけてあのレッドカーペットを歩いて来たのだろうか。そこにスタンリー・ブラック監督の姿もまた混じらせた。

そのシックな礼服姿は見違えるようで、あのお茶目とどけた雰囲気はどこにもない。出くわした知人と握手を交わし、談笑に目を輝かせて女優、ナタリー・ポリトゥワを妖精のように引き連れ式典会場へ姿を消していた。

余韻の残る中、時計が十七時五十五分を指し示す。

ついにエントランスから人影は消え、正面扉を閉めるための警備員と中継のテレビクルー、警備員をつとめる百々にレフだけがその場に残った。

静けさに薄く緊張が張り詰め、なだめて開いたままの防音扉からピッチを合わせるオーケストラの摩訶不思議な和音は漏れ出す。その不協和音が鳴りやんだ直後だ。オペレーターの声はイヤホンから聞こえていた。

「放送開始、三十秒前」

扉前で警備員もまた自らの腕時計を確認している。

「放送終了まで周囲の警備体勢を維持。所定区域、および会場内への立ち入りはこれより禁止されます」

その手で右、左、と扉を閉めていった。

連動するように式典会場でも内側から防音扉が閉じられ、確認したレフがエントランス異常なし、と小さくマイクへ吹き込む。

「各署員、局員からの報告なし。本番、十秒前、九、八……」

だとしてゼロカウントは読み上げられなかった。ただエントランスに設置された大型テレビへアカデミー賞授賞式のタイトルバックがきらびやかと流れ込んでゆく。式典会場からも生演奏のファンファーレはくぐもって聞こえ、ワンテンポ遅れて熱い拍手もそこに重なった。

舞台上の司会者がテレビの中で喋っている。

本格的な授賞式が始まる間際までを、レッドカーペットの録画でつなぐ段取りらしい。背にして女性レポーターはエントランスで視聴者へ向かい、何事かを興奮気味とまくし立て始めた。

やがて受賞者の発表は、あいだにショーを挟みつつ驚嘆と賛辞と謝礼にわきかえるまま進められてゆく。繰り返して全体の三分の一ほどが消化された十九時十五分。百々とレフ

はストラヴィンスキーと担当エリアを交代した。最も気の重いエリア、式典会場へと入って行く。

そこはまさにシューティングの真っ最中だった。表情を狙ってカメラはぐるり会場を取り囲み、狙い撃たれることを望んでめかしこんだ美男美女に有名著名人は、まばゆいばかりと肩を並べている。

光景に百々は目を見張っていた。緊張に警戒すら忘れて眩しすぎる光景へただ見入る。真逆と覚えた興奮に血が巡り出したなら、こうも浮世離れた場所へ一体どんな俗な賊が潜り込めるのかと確信していた。果てに紛れこんだとして邪な姿こそすぐ目につくはずだと、強くひとりごちもする。

だが夢の世界はほころびを見せず、全ては順調と流れて放送時間も残り一時間へ迫る。残念ながらナタリーは主演女優賞を逃していた。撮影賞を受賞した「バスボム」は主演男優賞を挟み、監督賞と作品賞の発表を待つばかりとなっている。

そこに「20世紀CINEMA」の明日もかかっていたなら水谷と田所も日本でかたずを飲むとその瞬間を待っているはずだった。百々は想像して、しばし遠く離れた日本を思う。「あたしがここにいて知ったら悔しがるだろうなあ、二人とも」
ここにはそんな二人の方が、よほど興奮できる人が集まっていた。

なら眩きは聞こえたか、見回していたレフがチラリ、百々へ視線を投げる。ちゃんと仕事しています。訴えて百々は急ぎ、態度でアピールし返し言っていた。

「ウチの支配人とバイト仲間のことです。支配人、昔、映画を作ってたって聞いたから。けどさ、ヒットする映画を作らなきゃってことに捕らわれすぎて、自分が何を作りたかったのか分からなくなったんだって。だからやめたって。びっくりしちゃう話だよ」

舞台では大詰めと、主演男優賞にノミネートされた俳優陣の出演作品や経歴をスリーンへ映し出している。眺めながらそれで水谷が水谷でいられるのなら間違った選択ではなかったのだ、とただ考えた。

「がんばり過ぎたんだよね。あの支配人が荒れたんだって。きつとさ、喜んでもらうためならって、思ってもないこと一杯やっちゃったんだよ」

様子は今の水谷からでは想像がつかない。だがもちろんそうまで尽くすわけは、収益が上がらなければ身もフタもない興行だからだ。膨大な人と金を動かすビジネスは自己満足の遊びとは違う。そこには携わる人々の生活がかかっており、それを無下にするそこそできはしなかった。

とはいえ創り手は少なからず作品へ思いを込めるもので、心無い情熱こそありはしない。受け取る側もまたその情熱に期待を寄せると、馳せ参じるはずだと我が身もまた振り返っ

てみる。

だが水谷はその実、両者はそうもうまく繋がらないのだと話していた。「20世紀CINEMA」の鳴かず飛ばずの売り上げもそれを証明しているようで、心が痛い。

どこかで何かが捻じれている。

切なさ、あのホットミルクには溶けていた。

思い出せば気持ちちは沈みかけ、だからこそ百々は笑う。

「あは。でも映画相手に荒れたらさ SO WHAT と一緒だよね」

苦役となった娯楽への復讐だ。だが本当のクリエイターなら、そのせめぎ合いの中に身を置き続けなければならなかったのですが。水谷は言ってもいる。

「乗り越えてきたから、みんなここにいるのかも……」

思いが百々に別の目で会場を見させていた。いやそれとも身を置き続けて今もなお葛藤の中にいるのか。はたまた偶然の一致と苦もせずかみ合った歯車に、思いがけず呼び出されただけなのか。思いは重なり、うかれきった華やかさへ、鈍く重みを混じらせていった。とレフの目が、そんな会場から引き戻される。百々へ向けなおされていった。

「なんだと？」

投げかける声は、これまで聞いたこともないほどと低い。瞬間、感じる嫌な予感本能

レベルで間違はなく、無視できないなら恐る恐るだ。百々もレフへと振り返っていた。目にしたお世辞にも穏やかとは言えない形相に、泣かされそうになって命乞いする。

「な、なんですかあ。あたしはリーダーじゃないですよお」

「違う。お前は今、何と言ったッ」

吐きつけるレフはもう、おたおたしていたなら頭からバリバリ食う、いや脳天を撃ち抜きそうな面持ちだ。

「だ、だから支配人が映画作ってた頃、やりたかったこととやらなきやならないことがかみ合わなくて逆ギレしちゃって、荒れたっていうからそれじゃまるで SO WHAT みたいだなあって。だったらここににいる人もみんな……」

そこでようやく百々も気づかされていた。

「……って、それ」

もしそうなら、だった。いくら待っても外にリーダーは現れないはずだと思う。そして招待客たちこそ、守らなければならぬ存在だと思ひ込んでいた事実を突きつけられる。

「つまりリーダーは招待客の誰かだという可能性もある、と言うことかッ……」

レフが絞り出していた。

「なるほど。リーダーのセオリーは、カリスマです。ならここにはカリスマしかいませんよ」

会話はマイクを通して筒抜けだ。ストラヴィンスキーが口添えていた。

「招待客の身体検査はどうなっているッ？」

舌打ったレフの確認は早い。

「バカヤロウ。自分がSPなら警護する大統領の身体検査を行うのか」

負けず劣らずの勢いでハートも返せば、無線の奥で確認を急がせる百合草の声は重なった。

「逃がしたアイツも彼のファンだと言っていたぞ」

いまさら合点がいくと苦々しげにレフはこぼす。その目を再び招待客へ投げた。

舞台ではちょうどプレゼンターが主演男優賞の受賞者を発表し、求められたスピーチに晴れやかと俳優が手を振っているところだ。そんな俳優へも賞賛する誰もへも、疑わしき影はまといつく。それどころか次の瞬間にもスピーチは声明文へ変わると、爆弾のスイッチが押される光景を過らせた。だとして宴もたけなわと状況は世界中へ流されている最中だ。いまさら一人一人の懐をまさぐるなどできはしない。

「待ってレフ。逃がした男は『彼のファン』だと言ったのね？」

思いついたように曾我が問いかけていた。

「我々は彼を慕うファンだからこそ、リーダーに従い準備してきたと。妙な言い回しだ。忘

れない」

「あくまでも可能性ですが、チーフ」

その声はすぐさま百合草へ向けなおされる。

「招待客の誰かがリーダーだとして、拘束した数名が行動を起こすことになったのもまたリーダーの『ファン』だったからと考えるなら、彼らが共通して興味を持つ人物、作品がリーダー特定の手がかりになるのではないかと考えます。それが本会場のいずれかと一致すれば……」

「だったら探せます！」

割り込んだのは百々だった。その脳裏には早くもあの強烈なニオイが舞い戻り、伴う光景を蘇らせている。

抜き出した端末の資料を開き、中から押入れのコラージュ写真群を選び出した。映画関連の貼り付けが壁の左下に固められていることはぼんやりだが記憶にあり、迷わず百々はそこを抽出する。

「覚えているのか？」

レフが上から驚いたようにのぞきこんでいた。

白熱する受賞者のスピーチは完全なる時間オーバーだ。味方につけて百々は、拡大した

押し入れ写真をスクロールさせてゆく。

「だって見るくらいしか、できる事がなかったもんっ！」

最中、作品は目に止まっていた。今まで気づくことができなかったのは、地色が社名で統一されたコンビニエンスストア販売のものであったからだ。未鑑賞を示すチケットはまだ切られておらず、つながるミシン目の左側に「バスボム」の文字を刻んでいた。

百々は体を強張らせる。眉間を詰めたレフがすぐさま、襟元のマイクを引き寄せていた。「一致するものがあつた。強襲者の押入れの中にスタンリー・ブラック。バスボムだ」

「うそ……」

声もれる。偶然だ。思うが早いかほかを探していた。くまなく目を這わせながら、もしここに田所がいたなら貼られたカラージュの中から目の前に並ぶ巨匠に名優の作品を見つけ出してくれるに違いないと思う。だが百々にはかなわず、熱狂的なファンは崇拜者のために犯罪をもいとわぬ暴挙に出るものだ、どこからともなく響く声を聞いていた。

「そんなの……。ほかは、ほかはどうですかっ？」

「ハッカーの部屋にも該当するものが一件よ」

オペレーターを駆った曽我の仕事は早く、同時に該当ファイルは転送されて、取り急ぎ開けばアメリカンコミックやフィギュアに囲まれたオタク部屋の一角、窓を塞いで貼られ

た雑多なポスターの中に「バスボム」のタイトルロゴとナタリーの足を見つめる。

「そういえばサイトのアクセス数が多いことで特別視されていますが、強襲をかけてきたサバイバルゲームのリーダーも監督のファンサイトへ足繁く通っていた記録が上がっていたんじゃない」

ストラヴィンスキーが教えて言った。

「当然ですっ！ 監督にはたくさんさんのファンがいるんですっ！ 舞台挨拶もすごかったんですっ！ あたし監督と会って話もしたから分かります。すごく愉快で優しくて映画に真剣で、魅力的で。疑うなんて時間の無駄で、これはただの偶然なんです。もっと他を……！」

だからこそ遮りストラヴィンスキーにたしなめられもする。

「百々さん、そういうのをカリスマ、って言うんですよ」

なぜかしら涙が出そうだ。

「神はどうだ」
百合草の催促する声が飛んでいた。なら躁っているらしいハートが返す。

「吹き飛ばされて判別しづらい」

「現場に集中して。後はこちらで預かるわ」

名乗り出る曾我はいつだろうと頼もしかった。

「待て」

押し止めたのはレフだ。その手はいつからか端末を握りしめると、まるでこれから撮ろうとしている写真のアングルを探るかのようになり、あらゆる角度を試していた。そうして見つめる先にはテレビクルー用に並べられたノミネート作品のポスターがあり、やがてひとつ角度をとったところでレフの動きは止まる。確かめる目が、しばし画面とポスターの間を忙しく行き来した。やがてその口は開いて知らせる。

「あつた」

それは端末に映し出された柿の部屋の、中でも燃え方が激しかった机横、吹き飛ばされてピンに頼りなく引っかかっていた紙の端くれだ。ナタリーの浮いたアバラはそこに独特の曲線をのぞかせていた。

「バスボムのポスターだ。間違いない」

「ハナ、レフ、カメラを舞台に固定させる。あくまでも可能性だ。周囲に十分注意を払った上でスタンリー・ブラックを丁重に会場の外へ連れ出せ。失礼のないように所持品のチェックを済ませろ」

指示する百合草に迷いはない。

「そんなの必要な」

押し止めて百々は身を乗り出していた。

瞬間、会場全体を揺るがし音は鳴り響く。

大きさにレフさえ肩を跳ね上げている。監督賞受賞者を讃えるファンファーレと拍手は、見ればその人を壇上へ送り出していた。残念ながら受賞者はブラック監督ではない。

「座席は前列より三列目。左端より五席目です」

オペレーターがブラック監督の座席位置を読み上げる。瞬いて我を取り戻したレフの目が、急ぎ姿を探して動いた。だが興奮も頂点とスタンディングオベーションを浴びせる招待客に、レフの背丈をもってしても前列はよく見えない。やがて始まるうとしているスピーチに招待客が着席して、ようやく視界は開けていた。

「いない」

「なんだと？ まだ作品賞の発表が残っているだろうがッ！」

ハートが怒鳴る。

「指示は撤回する。表の人員を向かわせる。ハート、お前は式典会場の足場、危険物の確認へ向かえ」

切り返す百合草に、おう、とハートは短く答えていた。

「代わりにレフ、お前がバックヤードへ回れ」

「了解」

言うなり走り出した後ろ姿を、百々も言い表せぬ不安を抱え追いかける。

「エントランスのストラヴィンスキーが到着するまで、ハナは舞台袖待機」

「わお、じゃ、急ぎます！」

行動を理解したストラヴィンスキーが指示を端折り動き出していた。足音は防音扉を潜り抜けバックヤード鉄扉を目指す百々の耳にも聞こえてくる。

「ストラヴィンスキーが到着次第、ハナはスタンリー・ブラックの座席を確認しろ」

「……了解。舞台裏を回って袖の反対へ移動します」

「正面入り口は警備員と警察に張らせる。万が一に備えて蜂起後の対応、スタンバイしておけ！」

百合草が最後をオフィスへ吐いていた。重なりオペレーターも現状を読み上げる。

「通用口、スタンリー・ブラックの出入りは確認されていません」

舞台では監督賞受賞者がスピーチを始めようとしていた。最も警戒すべく時間帯はこの次、作品賞発表の瞬間だ。

「当たり前だよ。監督はリーダーなんかじゃないって。レフも知ってるよね。きつと……ト、トイレだってっ！」

しつこく訴える百々の前でレフは、鉄扉のノブを握ると呼吸を整えている。やがて静かに引き開けてゆけば、その隙間に言った通りと手洗いからひょっこり出てくる礼服装姿の背中ではあった。

「ブラック監督を発見した」

かすれるほどに小さな声だ。レフがマイクへと吹き込む。

「なに、入れ違いか？ 俺は見えていないぞ」

バックヤードに人影はない。舞台下からだ。ハートが返していた。だとしてそれは偶然ではなく故意だ。可能性について誰も言及しないのは共通認識だからか。振り返る素振すら見せないブラック監督も通路を外へ歩いてゆく。

「接触する」

言うレフが足を踏み出していた。

「先に座席を確認してからだ」

百合草が指示を飛ばす。

「式典、会場内、到着！」

ストラヴィンスキーは告げ、間髪入れずハナが動き出していた。

「座席、確認、入ります」

聞いたレフの体が鉄扉ごと後退してゆく。

「間に合うのか。このままだと外へ出るぞ」

「通用口の警備員に足止めをかけさせる」

「だが外は、監督が何を疑われているのかを知らされていないんだろう」

「もう会場へ降りるわ」

ハナが割って入ったその時だ。監督は足を止めていた。

「立ち止まった。舞台袖横だ。懐を探っている。何かあるのか見えない」

レフはすぐさまマイクへ吹き込み、百々もその下から監督へと目を凝らした。

だとしてあくまでもハナは冷静だ。

「監督の座席が見えた。座面にはなにもない。近寄って足元を確認するわ」

舞台では作品賞、ノミネート作品が読み上げられている。音はバックヤードへももれ、そこに「バスボム」の名が上がるまでもなくブラック監督はチラリ、会場を盗み見した。ままたにふらりふらりと壁へ身をすり寄せてゆく。また覗き込むように胸元へ視線を落としていった。

「ダメだ。様子がおかしい」

目にして放ったレフの舌打ちは百々の耳にも聞こえている。

「足元に何かあるなら知らせろ。行って俺も確かめる」

否や鉄扉を押し開けた。

「ちよっ」

まずい。百々の唇も尖る。

置き去りにしてレフは走ることなく堂々と、歩いてブラック監督との距離を詰めていった。

「なら一人で行くな。応援を向かわせる」

「俺のことか！」

言う百合草にハートはすぐさま反応するが、一番近い場所にいたとしてもう間に合いそうもない。気配を察したブラック監督はすでに懐から顔を上げると、周囲へ這わせた視線を背後へ向けようとしている。

ブラック監督はそんな人じゃない。でも、もし、まさか。過ってやまないからこそ百々は焦った。焦るからこそ信じなければならなくなる。よもや、まさか、を現実にはならなかった。

だから百々も鉄扉を飛び出す。レフが声を掛ける前だ。大きく手を振りブラック監督へ精一杯に声を張った。

「かんと、くうーっ！」

きっとこれは煙草を吸いに出ただけで。携帯電話が鳴っていたからかもしれない。いや緊張に胸の動悸がおさまらないから唸っていただけで。とにかく「後ろ姿から当てようブラック監督ジェスチャーゲーム」。並べ立ててレフの前へ走り出る。

「何のつもりだ」

背でレフが小さく吐いていた。

答えず百々は進路を塞ぐ。

そんな百々へブラック監督は残りを端折り、弾かれたように振り返っていた。異様なまでに強張った二つの目が百々をとらえる。だが思いがけない場所で二度と会うはずもない顔に出くわせば誰だってこういう具合に驚くだろう。いやそう信じて百々はあの日と同じにブラック監督へ指を立てた。

「緑茶、いえーいっ！」

「セカンドバック発見。中を確認します」

ハナの声が教えている。

「監督の応援に来ましたあっ！」

耳に百々は手を振り上げた。

とたん強張っていたブラック監督の顔は過ぎ去った時を吸い込み、在りし日のそれへ膨らんでゆく。舞台挨拶でのおかしげな様子はそこにたちまち取り戻されると、手を叩いて笑い出した。

「おーまいが！　とうえにーせんちゅりーしねま、ネ！」

開けた大口は信じられない、と言わんばかりだ。ままに天さえ仰いでのけ反り笑う。

やはり何かの間違いだ。これから人を傷つけようとする人間がこんなに風に笑えるハズがない。きっとここにいるのは受賞の時のサプライズに備えてで、そんなたくらみこそ監督には似合っていた。

「イエース」

百々は振り上げていた手をおろす。警戒の極みと後頭部に刺さるレフの視線もそのままに、ブラック監督へ歩み寄っていった。

舞台ではついに発表をひかえたプレゼンターの咳払いが響いている。

そしてハナは最後まで冷静だった。

「動作の様子なし。けど、あの弾が飛び散りそうよ」

嘘だ。

歩みは止まっていた。

「ハートツ！」

百合草の声がこれまでにないほど大きく響く。

たったひとまたぎだ。そんな百々の傍らをレフは追い抜いていった。

有り余る気迫が、たちまちブラック監督の笑いを凍り付かせる。溶けるまもなくそこに死の影は張りついて、引きつり泳ぐ目を跳ね回らせた。最後、落とした懐めがけて手を差し入れる。瞬間、レフの背は、監督へ倒されていた。

「ミスター、ブラッアクツ！」

声もまた、讃えて唱える。

「……バスボム！」

どうって拍手が湧き起っていた。祝福の音色は奏でられ、そこに駆け出したレフの靴音は激しく重なる。飛び掛かると懐の腕をわし掴みにしてみせた。

振り払おうともがくブラック監督の顔が、見る間に赤黒くうっ血してゆく。

だがかなわず抜き出され、勢いにペン型の何かは飛んで床へ落ち、蹴って遠ざけ、レフはその足でブラック監督の足もまた払いのけた。バランスを失った監督へのしかかり二人して倒れ込めば互いの体は床で跳ね、レフを押しつけブラック監督が上になり、その襟首を掴んでレフがすぐにも態勢を入れ替える。これ以上を封じ込めてレフは、監督の喉へヒ

ジを押し込み馬乗りとなった。共に浴びせるロシア語は、ブラック監督にはとうてい理解できないだろう。

どうやら受賞者を失った会場は、演奏と拍手を切り上げるタイミングを失っているようだ。

ただ中で百々もまた立ち尽くす。

紛れて音は鳴っていた。

レフの背が、とたん小さく跳ね上がる。

それきり双方共の動きはそこで止まっていた。

やがてしぼむように力を失なくし、剥がれてどうっとレフは床へ身を投げ出す。

仰向けと横たわった胸の動きが尋常ではなかった。

入れ替わりと身を起こしたブラック監督に表情はなく、その手で短銃はゆう、と煙を立ち上らせる。

フリーズ。

傍らへ飛び出したのはハートだ。真正面に銃をかまえたポーズこそコンバットシューティングか。まもなく搬入口からも警備員に警察官が飛び込んで来る。ブラック監督の背へ次から次へと飛びかかってゆくと、その手から短銃を筆り取っていった。

任せたハートは回り込んでレフの傍らだ。屈み込むなり上着を、白いドレスシャツを払いのけてゆく。

「だから一人、飛び出すと言った！」

怒鳴る声は百々へも十分届いていたが、何もかも現実だと思えず全てがうまく頭へ入ってこない。

「……触るな、ヒビく。折れた」

どうにか絞り出したレフの声もだからして、伝わってはいなかった。それでも手を止めないハートは最後、現れた防弾ジョッキの空いた穴へ指をかける。掴んで開かせたレフの口をのぞき込んでようやくだ。せり上がっていた肩を下ろしていった。

「安心しろ。肺にも損傷はない」

その口はまったく、と言いたげだ。

「おかしいと思えばこれか。胸に二枚も仕込んで来たとはな。自分のことを知っていて何よりだ」

見上げるレフの顔は今や白いを通り越して蒼い。それでも薄く笑って返す辺り相当の負けず嫌いだと知れたなら、冗談じゃないとハートはその肩を押しやり立ち上がっていた。

「ちようどだ。そのままここで痛がっている」

揺さぶられたレフがなおさら顔を歪めたところで、残してブラック監督の元へと離れてゆく。

かたや式典会場は忽然と姿を消したブラック監督にざわついている様子だ。当然だろう。当の監督はバックヤードの冷たい床からこうして引きずり起こされていた。

そんな監督には舞台挨拶で見た魅力も、エントランスで見た凛々しさも、もう何も残されていない。魂の抜けた痴呆のひと、脱力するまま百々の前にぶら下がっていた。

見るほどに作品に覚えた感動も、共に過ごしたわずかな時間さえ、百々の中から剥ぎ取られてゆくようで耐えられない。目の前でレフが撃たれたところなら、なおさら気持ちに整理はつかなくなっていた。

「どうして……」

ほとぼしる思いを止めることはもうできない。

「どうしてこんなこと、しちゃうんですかあっ！」

舞台挨拶の監督は今も観客たちへ手を振っていた。

「だって監督はたくさんの人が尊敬して、みんなが大好きな憧れの人なのにつ！」

観客もまた監督へ拍手を送っている。

かき消して、そのとき力はブラック監督の目へ戻っていた。

「SO WHAT! SO WHAT! SO WHAT! SO WHAT!」

それがどうした。

力の限りに訴える。

「びじねす、デシヨウ!」

勢いに、両側にいた警官は振り回されていた。

「セイコウシテ、ジブンノエイガ、トルタメデスネ!」

食らった百々もまた身を強張らせる。

「タメノウソ、アナタタチハ、シンジテイルダケ!」

「うそ?……」

「すたんりーぶらっくハ、エイガハ、イナイ」

声は地を這い、百々は耳を疑う。

「アナタタチノミタイモノ。カワリニツクリマシタヒト。ワタシデハ……、ナイ。スバラシイ。タノシイゴラクハ、アナタノサクヒン……」

やがて機械的に付かせたヒザで、警官は監督の後ろ手を拘束してゆく。

「イツ、ワタシハ、ジブンノスバラシイ、ツクレマスカ?」

されるがままに問いかける監督の目は百々をとらえていた。

「イツ、ワタシハ、ジブンノタノシイ、ユルサレマスカ？ エイガモアナタハ、スキデスカ？」

その首はかすかと振られてうなだれる。

「シンジ、ラレマセンネ。ワタシハ、アナタモ、びじねすノタメ。タノシムドレイ、ダケ」確かに提供され続けてきたい夢はマーケティングにリハーサル、抱く期待に、いや期待を裏切る期待にさえ先回りした戦略の賜物だといえた。その全てが汲み取った期待をコピー、具象化しただけだというのなら、作り手の「情熱」はさほど重要でなくなるだろう。それでも作り手は存在するときその「作り手」とは一体何なのか。

「キガツカナイ、ソノメヲ、ヒラク。ウバウびじねすカラ、ワタシ、カイホウスル！」

本物のクリエーターなら悩み続けなければならなかったのですが。水谷がニヒルと笑い返している。悔しさはようやく百々の中へもこみ上げて、なら鉄則とどうして期待を裏切ってはならないのか、むしろ期待を裏切る驚きを求めて足を運んだのではなかったのか、疑問は湧くと「バツファロー」はエンドロールを巻き上げていった。

裏切るそれ以上の驚きを飲み込めないのは、期待通りでなければ受け入れることができないのは、受け取り手のせいだとしたなら。

だから作品は機嫌を取るための道具と誰もを、こき使って金を巻き上げているのだとす

れば。

信じちゃいけない。

喜びの全てはただ企みと、歪んでゆく。

けれど、と思いは揺れていた。何しろ一度でもそうだと認めてしまえば「バスボム」がもたらしたあの騒動に感動も、おかげで田所と対峙できた一部始終も。上り切れた嵐の夜の階段に、気づけたレフの殺伐ささえた。弄ばれただけとなるほかなくなっていた。そんなことあるはずない。

全てのきっかけはスクリーンの中にあり、信じて今ここは存在している。

「違いますっ！」

これでいいのだと、そのとき気づかされていた。

だから数多受け手と送り出されるたったひとつの夢想は、いつだって繋がってゆけるのだ。

「監督は監督ですっ。わたしは嘘だなんて思っていませんっ！」

言葉が通じているのかどうかなど二の次だった。

「解放なんて余計なお世話ですっ！」

百々は叩き返す。

「監督にはヒドイ嘘だったかもしれないけど、わたしにはそれが本当だったんです。他のファンだってみんな同じです。でないとあんなに熱心になれっこないっ！ その、監督の思い通りじゃなくなったら残念な思いしてるかもしれないけれど、でも、違っても、みんなの本当を引き出したのはぜんぶ監督で、ぜんぶが監督の作品なんですっ！ そのキラキラが好きだから。みんな監督が、作品が大好きなんですっ！ 奴隷だなんて、なっているのは、そんなヒドイこと言うのは……」

やおらわなわな足は震えだしていた。

「そんなわたしたちを知らない、嘘だなんて信じちゃってる、困った監督だけですうっ！」吐き出せば肩は揺れ、押さえつけて百々はブラック監督を真正面に睨みつけた。

前にしたブラック監督はまるで豆鉄砲を食らったかのような面持ちだ。だがやがてその頬は崩れてじんわり、緩んでゆく。予感するのは浮かぶだろう笑みで、百々はあの日のように鋭く放たれるザツツライトを待ち受けた。

だがそこまでだ。

象る事はない。元通りとすばんだ頬は力を失う。

そんなはずなどありはしなかった。見極めたくて目を凝らす。だが再びうなだれた監督

に動き出す気配はもうなかった。

両脇で警官がその体を抱えなおしている。歩き出せば引きずられるようにして、ブラックス監督はここ「ベガスビッグビューイング」から離れていった。

消えた搬入口はやけに明るい。滲むとそれは目に沁みて、百々はただうつむいた。靴先を必死になって睨むがそれもミラーボールときらびやかだったなら、いてもたってもおれず身をひるがえす。崩れるように座り込めば、そこで浅い息を繰り返すレフはまったくもつてらしくなく、様子に滲んでしみたそれもまた涙なのだと気づかされる。だが止めてどうなるはずもない。

「レフっ、死んじややだあっ！」

力の限りだ。不条理の全てをぶつけ揺さぶった。

……いや、それこそ拷問だが知ったことではない。

レフは短く呻き、様子に百々は今にも死ぬんじゃないかと、なおさら揺さぶる両手へぐいぐい、ありったけの力を込める。

「映画見に来てって言ったのに。今度の新作、十八歳未満お断りなんだよおっ。すごくエッチいんだよおっ。絶対、見なきゃソンだってえっ！」

だとして、そのために生死の境から蘇ったところで、どうも後が気まづくないか。とい

うか自分を撃った相手の映画を見たがるものなのか。

「て、手を、離せ」

理由はともあれ、レフの口もわずかに開く。

「死んだら見られないよおつ。おばあちゃんに会いに行くのはまだ早すぎるよおつ。もっと若くて、カワイイ子が泣いてんだよおつ!」

聞こえず百々は吠え、たまりかねたレフの頭はついにそこで持ち上がった。

「勝手に殺すな。防弾ジョッキがある」

おかげで百々の涙もようやく引っ込む。

「……そ、言えば、レフ。血、出てないね」

眺めまわす間が気まずい。

埋めてレフは元の位置へと頭を下ろしていった。

「骨が、二、三本、折れた」

「あ、れ?」

首をかしげる百々へお前は残念なのか、言いたかったろうにこうも続けてみせる。

「顔は、立てた」

「なに、なに言ってるのお?」

その脈絡はつかめず、混濁するほど重篤なのか、百々はただ慌てふためいた。

「待った」

言われてようやく鉄扉前の事を思い出す。あのときレフは確かに一度、身を引いたのだ。

「そんなこと知ってるよ」

「あれが、限界だ」

浮きあがっていた尻もそこで床に着く。

「もういいってば。人の気持ちはそんなに早く変わらないってタドコロも言ってたもん。何だかレフ、特に遅そうだし」

と力説したところでレフが田所を知る由はなく、ただ痛みとは別にむっ、と眉間を詰めていた。

ストレッチャーと共に救急隊員がなだれ込んできたのはその時で、まるで落し物でも拾い上げるような具合だ。いとも簡単にレフの体を移し替える。

「待って、あたしも行く」

追いかけて百々も立ち上がった。

「残れ。英語を喋れんヤツがついていったところで役に立たん」
ハートの言いようにひたすらパクパク、空を食む。

そこへ現れたのは爆発物を隔離したストラヴィンスキーだ。

「ストラヴィンスキー、ここを任せるぞ。ドドを預かれッ！」

「はいはい、喜んで」

指示に遠慮がなかったとして、貴公子の朗らかさはいつも通りである。それでも追いかけてようとした百々の肩へ手を添えようと、押しとどめてみせていた。

表では救急隊員が、乗り込んだハートもろとも覆い隠してドアを閉めている。サイレンが鳴らされることはない。滑るように救急車もまた「ベガスビッグビューイング」から離れていった。

知る由もなく式典は主役不在のまま進行中だ。スピーチのため舞台へ上がったナタリー・ポリトウワやスタッフたちはだからして、奇妙な顔を向け合っている。

ならかまうことはないだろう。爆発物をストラヴィンスキーへ預けたハナは上がった舞台で彼女たちに代わると、堂々マイクの前へ立っていた。

「みなさん、申し訳ありません。スタンリー・ブラック監督は体調不良のため、先に会場を後にさせていただきます。その、皆さんもご存じのとおり繊細で特別な方なので」

すくめた肩でおどけてみせる。

「その代わり預かった短いメッセージを、わたくしが皆さんへお伝えしたいと思います」

静まり返る会場内に、その出所を疑う者は誰もいない。見回しハナは姿勢を正していった。

「まず、この作品の制作に携わったすべてのスタッフとキャストに感謝を。そして私の作品を長らく待ち望んでくださった全てのファンの皆様へ、感謝と敬意を表します。この賞をいただいたその後も、なにも特別なことは起きません。わたしはただ皆さんの心に残るような作品作りに、よりよい作品作りだけに励みたいと思っています。それまでの間、しばし充電期間をいただくことをお許しください。またいつか、皆さんの期待に応えることのできる別の作品でお目にかかれることを」

かしこまっていた肩の力を抜く。

「スタンリー・ブラック」

添えて半歩、退いた。

「以上です。サンキュー」

会釈して返せば、割れんばかりの拍手は巻き起こっていた。それはあくまでも暖かく、穏やかなショーの幕切れだった。

翌日。

「メイヤード」の仮オフィスを訪れることなく百々は、待機の指示に従い帰国の途についている。もちろん騒ぎから十二時間以上が経った今、どこかでリーダーが蜂起を促したと言ふ事実は確認されていない。準じた動きも認められず、少なくとも認識されている危機を免れたことだけは確かだといえた。

アオザイ一式は支給品でホテルの部屋に置いたきりだ。誰とも別れの挨拶すらかわしていない。味気ない荷物を受付へ預け、空港まで送り届けてくれた乙部とのみ別れの挨拶をすませる。

そうして気持ちの整理がつかぬまま巻き込まれたのは「20世紀CINEMA」のとなでもない騒ぎだ。当然だろう。「バスボム」は作品賞を取った。問い合わせや押し寄せる客は舞台挨拶なみで、復帰するや否やの毎日は壮絶を極めることとなる。

仕切る水谷は冴えたものだった。一部始終もまた望んでいた通りの光景を作り上げてゆく。

だが訪れた人々が満足の声をもらせばもらすほど、百々の中で戸惑いは膨れ上がっていた。その度にブラック監督の叫びは心の奥から蘇ると、複雑と絡まって百々から感動と興奮を薄れさせてゆく。

「すみません。お釣り、下さい」

せがまれて我に返る。見れば「バスボム」のパンフレットを手にした客が、むっとした顔つきで立っていた。慌てて百々は小銭を拾い上げる。

「あ、すみません。お返しは三百円です。ありがとうございました」

それら混乱から一か月後。客の去った百々の視界には在りし日のフロアがガラんと広がっていた。

カウンターにはいつも通りと社員が立ち、アルバイト仲間が乱れたロビーを片付けている。背にあの写真は飾られると、振り返れば誰もが眩しいほどの笑みを浮かべた舞台挨拶の光景は、おどけたブラック監督のサインと共に百々を見下ろしていた。

誰もがあの日の監督を知らない。いや、知らなくていいのだと思う。それで夢は夢のままに。希望と勇気もそのままに守られる。胸に再び、百々は前へと向きなおっていった。

抱いた思いは薄れることなく、さらに半月が経とうとしていた。しかしながらオフィスから連絡はこず、無駄に相手をさせるわけにはいかないと自重していた百々の我慢もそこでついに限界を迎える。

それは早番上がりの日だ。百々は警察病院へ向かっていた。

地下駐車場にワインレッドのワゴンがないことは、とうに知る事実だろう。だがあるうことかエレベータが塞がれているなどと、待っていたのは思ってもみない展開だった。

以前からあったかのように置かれている消火栓を、信じられず百々はまさぐり続ける。おかげで立派な不審者に成り下がったとして、とがめてつまみ出そうとする者さえ出て来ないのだから全ては決定的でもあった。

百々をたずねて「20世紀CINEMA」へとある人物が訪れたのは、その事実には啞然としていた矢先のことだ。

「IDと端末の回収、お預かりしました登録時の個人データ消去の立ち合いをお願いに参りました」

銀行員ではなからうか。髪は真っ黒で濃紺のスーツを着た、間違いなく日本人の男が臆面もなく言う。

支配人に開けてもらった控え室内、百々はテーブルを挟んで向かい合うと、そんな男へ嫌味でもなんでもなくこう口を開いていた。

「あたしは、クビですか？」

身分証とイヤホンの巻きついた端末を、同時につい、と男へ差し出す。手に取った男は身分証を脇へ寄せると、グルリ眺めた端末からイヤホンだけをほどこいていった。

「こちらは、個人の所有物にあたりますので」

なるほど確かにそれはレフからもらったものだ。何か大事な証拠のような気がして百々は両手で受け取る。前で男はカバンの中から数枚のディスクを取り出すと、こうも続けて百々へ言った。

「申し訳ありませんが解雇理由はこちらの都合としかお伝えできません」

それは妙に納得できる回答で、あそこはそんな場所だと思えてならない。そして張りつくレフすら静養中なら、自分はこのまま切り離されるに違いないと口を結んだ。

「こちらが個人データのマスターです。粉碎後のサイン……」
なら、どうしても確かめておきたいことはある。

「あの。レフは」

切りだしていた。

「レフ・アーベンは、もう元気ですか？ それだけでも教えてほしいんですけれど」

作業の手を止めた男の顔は、とにかく素っ頓狂だ。挙句、こう言う。

「レフ・アーベンは、わたしですが？」

まさかと百々はソファの上で跳ね上がっていた。

「ち、違います。あたしが言っているのはうすらデカくてロシア人で、笑わないのに笑うと

怖くて、タイミングも間違っていて、野っばらで火を消す、マダムキラの、チェブ見て泣く、乾布摩擦が日課のレフですっ！」

その形容詞がよほどおかしかったに違いない。男は向かいで小さく嘖き出す。

「申し訳ありません」

これも伝えられないことなのか、と百々は眉を下げていた。だが作業を再開させた男の説明はこうだ。

「この名前は便宜上のものです。ですのて今はわたしがレフ・アーベンです。交代したという事は、おそらく別の配属になったか退職されたものと思われれます。それ以上は私のわかりかねるところです」

あなた、思いっきり日本人なんですけれど。つつこめない。つつこめないほど肩から力は抜けていた。そんなことなど欠片も知らず、なら他のみんなも偽名だったのか、思いは通り、ひどい、そう眩く力も沸いてこなくなる。

男はそうして取り出した携帯用のシュレッダーへ電源を入れると、派手な音を立ててデスクもろとも身分証を粉碎した。破棄したことを証明する書類へ百々にサインを求め、最後に作った覚えのない通帳を百々へと渡す。給与と言うが、そこに刻まれた数字は慰謝料のようでもあり、手切れ金のようでもあり、そして口止め料のように見えてならなかった。

金額など問題ではない。突き返せば受け取れないと断られて、百々はその日のゴミと一緒にバックヤードのゴミ捨て場へ捨てている。悔しいような、さみしいような、それはひどくみじめな気持ちだった。気づけば流れていた涙を拭って更衣室へただ飛び込む。

帰り道は今日もまた田所と一緒に。田所は妙にここのところ疲れてないか、と百々へ問いかけている。その通りだ。相変わらずよく人の顔を見ていると思う。どうしていいかわからず、せっかく押し込めた涙がまた溢れそうになっていた。

なら、だから用意したんだと笑ってみせる田所はマジシャンだ。ジーンズのポケットからあのビッグアンプル、それもプレオープンチケットを抜き出してみせる。

「おじさんが急にウチの仕事、手伝ってくれて言っただろ？」

百々は鼻をすすり上げ、うん、とうなずき返していた。

「あれ、おじさんの会社がビッグアンプルのメンテ、参入することになって急に忙しくなったからだって」

「うそ」

「それ、先に言ってくれて言うんだよな。ま、で、これはその戦利品」

得意げとアヒル口を尖らせる。眺めて百々はガレージ前、自販機の明かりに照らされポカンと口を開いていった。

「まだ一月以上先だし、プレだから周りの店も開いてないけど、おま、どうする？ 行く？」
聞く田所は、無理強いしない。だから単純に興味は沸いて行ってみたいと思えていた。

「けど」

光景は舞い戻る。

「本当は、そう思わされてるだけで解放しなきゃ、みんな騙されてるだけなのかも」
笑った後で知らされるのはもういやだ。だが田所にこそ、その意味は伝わらない。たがいちがいにへこませた眉で百々の顔をのぞきこむ。アヒルと尖らせた唇で言った。

「おま、何言ってるの？ 思わされてるわけないだろ。俺はお前と行きたいって思っただけ。休んでる間に何があったのかは知らないけど、元気出たらいいなと、俺が思った」
挙句、暴露されたのは神がかり的、快挙だ。

「だからじゃんけん三十人抜き。社員差し置いてゲットできたワケ。どう？」

「さっ、三十人抜きいつ？」

その顔を得意げと光らせる。

「タ、タドコロ、すごいよ。それ、すごすぎるよ。なんかちょっと怖いくらいだよ」
百々の握り拳も震えてしかり。

「ま、行かないなら、売ってガス代にするだけだし」

言う田所は割り切りがよすぎて、止めなければ本当によりかねなかった。冗談じゃない。いや、そんなことさせられやしないと思う。何より田所となら行っても楽しいと百々には思えて、田所の言うとおりの必要なのはささやかな「楽しみ」だった。

なら監督も、と百々はあの日を思い起こす。行き詰まり思いつめるその前に、映画だろうと枕投げだろうと、ビッグアンプルだろうと、誰かの与える楽しみの中へ荷を下ろせばよかったのだと考える。その時、世界は少し様子を変えて、気づけた何かがまた違った結末を与えていたかもしれない。

出来なかった監督こそやはり悩み続けた本物なのか。期待と主張の絶妙なブレンドが見る者を惹きつけてやまない、だからこそ踏み外してしまうほどにまで研ぎ澄まされた、誰より理想に近い場所にいた人物だったのか。

遠く離れたこの場所から、そっと後ろ姿を思い出す。

だが今の百々にはもう縁遠く、全ては己が愉悦と明日のもとに晒されていた。ままだに田所めがけえい、と指を伸ばして跳ねる。

「だめだめっ。奇跡のおすそ分け、もらうっ！」

たちまち尖っていたアヒル口は満足げと伸びて、かわし田所はチケツトを泳がせた。

「ほいほい」

後じさって車道へ出る。

クラクションはいさめてそんな二人へ鳴らされていた。

かばい田所が咄嗟に百々を引き寄せる。腕の中、驚いたと振り返った百々をかすめてワゴン是一台、走り抜けていった。

顔がその助手席で振り返る。

合った目に、百々は思わず息をのんでいた。どうやら田所も気づいたらしい。

「あぁっ！」

叫んで指を突きつける。

ワゴンの窓は答えておろされ、突き出した手をレフが振っていた。ならハンドルを握るのはストラヴィンスキーか。どこまでも続く青信号の中、遠のいてゆくワゴンは二つ、クラクションを鳴らす。

「待ってっ！」

安堵なのか、親しみからか、それとも言い忘れたさよならだからか。会えばひどい、なだと思えなかった。百々は脇目も振らず追いかけ走る。

「みんなに、よろしくってっ！」

伸び上がってまでワゴンへ向かい手を振った。

その姿が二人に見えているのかどうかは分からない。けれどテールランプが見えなくなるまで手を振る。

百々は精一杯に、振り続けていた。

某日、午前、四時三十分。市内、某私鉄、主要駅前。人気のないロータリー。

彼は高速バスへ乗り込むため、その傍らに設置されたロッカーを使用する。不要と判断した荷物は、夜通し働いて汗にまみれになった作業服、一式だ。

惚れ込んだ歌手のチケットはまだ手に入っていなかったが、会場前なら金さえ払えばいくらでも手に入ることを知っている。そしてそのためのキツイ労働は終わりを告げ、これから彼にとって夢のひと時だった。

ロッカーはほとんどが空いている。彼はいちばん使いやすい胸の高さの扉を引き開けた。少し覚えた妙な手ごたえに別のロッカーを選び直せばよかったろうが、遅かった。

跳ね上がったのはロッカー全体か。破裂音が静寂を切り裂く。鍵のかけられていない扉は漏れた圧力で一斉に開いて踊り、そこからわずか火の粉を吹き上げた。

前にした彼の体は一呼吸おくと、棒がごとくゆるり、後ろへ倒れてゆく。床で跳ねた体

からこぼれ落ちたのは、爆発の衝撃で食い込んでいた何かだ。固い音と共にそれは冷たい床を転がって、ずいぶん離れた場所で動きを止める。

大きさはパチンコ玉ほどか。

焼け焦げて見る影もない。だがその表面に刻印はある。ローマ字なら、読み下すに造作もなかった。

そこにはこう書いてある。

「SO WHAT」と。

『SO WHAT?! 1st. season』 終劇